デビル・サマナー《異邦人伝》

日高明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デビル・サマナー《異邦人伝》

【Ｎコード】

Ｎ５２６８Ｘ

【作者名】

日高明人

【あらすじ】

そこは京都が首都である日本。歴史ある街並はなく、高層ビルが立ちならび、地上に地下に張り巡らされた電車網、最大の人口密度を誇る都市であり、天皇が住まう御所がある。異界なる京都、そこに住む二人の異邦人。イタリア人の男とロシア人の女は、世界をまたがる数奇な物語へと引きずり込まれることとなる。隣に、悪魔を、引き連れて。

第一話　悪魔召喚プログラム（前書き）

異邦人（いほうじん）

・外国に定住または長期滞在する外国人。幕末から明治にかけて日本に滞在した西洋人は、異人と呼ばれた。

・異教徒を指す。

ユダヤ教の『聖書』（キリスト教の『旧約聖書』）においては、ユダヤ人以外の者を指し、

キリスト教の『新約聖書』においても、特に　ユダヤ人以外を指すと思われる。

（初期のキリスト教徒はユダヤ人が多く、ユダヤ教の一派であるとみなす方が適当である為、

また異邦　人の信徒なる表現も新約には存在するため）

《Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより引用》

第一話　悪魔召喚プログラム

アナウンサーが明日の天気予報を少しばかり嬉しそうな声で伝える。
男性はその声を聞きながら、わずかに落ち着かない様子でリビングの椅子に座っていた。
時計の長針が気になっているのか、何度も何度も天井近くの時計へと視線が飛ぶ。
天気予報がおわり、テレビの放送内容が一日の出来事へと変わったとき、呼び鈴が鳴る。

音に身体を震わした男性は、慌てた様子で立ち上がり玄関へと駆け寄る。
靴下のまま玄関へとおり、男性は鍵を開いて外へとドアノブを動かす。
玄関の外に立つのはひとりの女性、寒さのなか急いだのか頬は朱色混じり。

自宅に女性を迎え入れ、男性はプレゼントがあると言って、女性へ小さな箱を渡す。
驚きと喜びが入り交じった表情となった女性は、箱を受け取り、掌の上で丁寧に箱を開き、
なかに納められていた指輪の輝きを眼にする。
髪をかく仕草をしながら男性は言葉をつむぐ。
女性は頷きながら箱を両手で握りしめ、頬からしずくを落とす。

しばらくの時間が経過して、部屋に置かれた大型の液晶テレビから、カウントダウンの掛け声が響く。
カウントダウンが終わる直前、男性の横に寝そべる女性はささやく。

「新年あけましておめでとう」その言葉がささやき終わったとき、液晶テレビからの音が途絶えた。

見ればテレビは真っ暗であり、
不審に思った男性はリモコンを手にとり操作するものの、テレビは反応を返さない。
男性は何度もリモコンを手に、ボタンを押す。しかし、テレビは真っ暗。
壊れてしまったのだろうかと思い、男性はズボンを履いただけの姿でテレビに近づく。
女性も白いシーツで身体を包みながら、訝(いぶか)しげな視線をテレビに向ける。

男性が近づいた瞬間、暗闇を映すテレビから、異形の腕が現れる。
腕を見て男性は驚きあとずさり、女性は甲高い叫び声を上げた。
腕の次には血まみれの牙を持った口が現れ、
腰を抜かしてテレビの近くで尻餅をついた男性に向かって腕が延びる。

口に続いて血走った眼をした、赤黒い体毛の頭部が暗闇から出て来た。
異形は逃げようとする男性の足首を掴む。
足首を掴まれた男性は悲痛な叫びとともに身体を動かすが、
足首を掴む力からは逃れられず全身をテレビへと引っ張られ、
ついには獣の腕とともにテレビの暗闇へと身体をひきこまれていった。

沼に沈むようにして男性がテレビの暗闇へと引き込まれるのを見ている女性は、

全身を震わせ歯をがちがちと鳴らし、現実を否定する言葉を呻き続ける。

にぶく、物の落ちた音が、部屋に、響く。

女性の眼に映ったのは、肘から先だけの右腕。
肘から先は、噛みちぎられたのか、
筋肉や血管がぷららぷらと飛び出ており、白く尖った骨が見えていた。
眼を大きく見開いた女性は、再びテレビの暗闇から顔を出した、
赤い赤い血を垂らす異形のつりあがった口を見て、最後の声をあげた。

●　●　●

時間は遡り、十二月二十八日。

仕事の納品を終え、息抜きにＷｅｂで出回り始めたフリーゲーム、
「シン・メガミテンセイ」をダウンロードしてプレイするひとりの男。

モニターに映る画像は、悪魔と話し、闘い、使役するロールプレイングゲーム。
システムの新しさだけでなく、勧善懲悪（かんぜんちょあく）ではない物語は秩序の守護者にも、
混沌の導き手にもプレイヤーはなることができ、なによりも全ての調停者（ちょうていしゃ）として、
傍観者（ぼうかんしゃ）にも救世主にも破壊者にもなれる。
自由な立場が選べるだけでなく、選んだ立場で変化する物語も評を

博し、
なぜここまでのゲームがフリーであるのかを疑問視するプレイヤーもいるほどであった。
彼は「シン・メガミテンセイ」の攻略掲示板を眺めつつ、ゲームを進めていく。

「よく出来たゲームだ」

彼のつぶやきが部屋に響く。

一度マウスを握る手をはなし、そばに置かれていた白いマグカップへ手を伸ばす。
白いマグカップからは暖かさを示す湯気が立ち上り、彼の鼻腔（びこう）へほろ苦さを感じる香ばしさを漂（ただよ）わす。
そして、香ばしい匂いどおりの味が舌に広がる。
適度な疲れと相まって、普段呑んでいる珈琲がより一層彼には美味しく感じられた。

「けれど舞台が現代日本のわりには、首都が東京ってところが驚きだな」

マグカップに付けていた口をはなして、彼は独り言をつぶやく。

「現代の日本を舞台にするなら、そのまま首都も京都のままにしておけばいいのに」

なぜだろうな、と心のなかでつないで思う。

彼が見つめる液晶から音がひとつ響く。
黙ったまま彼の目線が液晶の左上へ移動する。目線の先にはＭａｉ

ｌが届いたことを知らす鳥のアイコン。
アイコンには届いたＭａｉｌの数を知らす数字が共にあった。Ｍａｉｌ受信数「３」。
数字を確認したところで、玄関から来客を知らせるチャイムが鳴る。
二回。

「ん……サクラ、かな」

鍵を開く音が聞こえたのちに、鍵を閉じた音、そして靴を脱いでスリッパへと履き替える音。
そのままスリッパの足音は男のいる部屋へと近づいていく。
リビングへとつながるドアが開かれる、そこには白に近い金色の長髪、
一目でわかる異人の証として、青いの瞳を持つ女性の姿があった。

「おかえり、サクラ」
「ただいまジェリオ、ってまたそのゲームしてるの？」

ジェリオと呼ばれた男は、やや赤みがかかった焦げ茶色のくせ毛を手でかきながら、
仕事は終わってるんだからいいだろ、とぼやく。
そのまま彼の黒い瞳は時計へと向く。

「ああ、サクラが帰ってくるわけだ。もう九時過ぎてたか」
「あ、その言い方だとまだ晩ご飯食べてないんだ。もー」
「仕事納めもあって忙しかったんだよ」
「それは私も同じ！　でも丁度よかった、私もお腹空いてるし作るね」
「ああ、頼むよ。洗い物はやっとく」

わざと怒った顔をしてみせた女性は、脱いだコートを壁に掛け、鞄を置いたのち、
両腕の袖をまくりながら台所へと歩いていく。
冷蔵庫からいくつかの野菜を取り出し、テーブルへと置いた女性は、ふんふんと思案した顔をしたのち、声を出した。

「ねーえ、面倒だから一品もので構わない？」
「あー、十分十分」
「はーい。じゃあちょっと待ってて」

その言葉のあと、リビングの台所からは小気味良く包丁の立てる音、蛇口から流す水の音、戸棚を何度か開く音が聞こえ出す。
もういちどマグカップの珈琲に口をつけた男は、視線をモニターへと戻す。
ブラウザ、ゲーム画面、Ｔｗｉｔｔｅｒ　のウィンドウが並んでいるなか、
男の視線はＴｗｉｔｔｅｒへと留まり、『仕事がおわったー』と打ったツイートへのリプライ。

『@Ｇｉｕｌｉｏ＿Ｃ　やあ、いま時間あるならチャットでもどうだい』
「いいタイミングだな、Ｓｔｅｖｅｎ」

マウスを手にとり、ポインタを動かして男はＳｋｙｐｅを起動する。
その間にゲームをセーブし終了、Ｓｋｙｐｅのチャットウィンドウがモニターに展開。
いくつものログイン表示となっているアカウントに並んで、
【Ｇｉｕｌｉｏ】と書かれた表示名がログインを知らせる緑色へと変わる。
その瞬間、チャットウィンドウが開き文字が表れた。

■『やあ、すぐに来てくれて嬉しいよ、Ｇｉｕｌｉｏ』
□『なに、シン・メガミテンセイの制作者様がじきじきにおよびなんだ、すぐ来るさ』
■『ハハッ、やめてくれないか。くすぐったくて仕方ない』
□『それでどうしたんだ？　また新しいアイディアでも沸いたのか？』

よどみのないタイピングで男は文字を打ち込んでいく。
開いたドアの向こうからは、野菜と肉の焼ける音とともに匂いがただよってくる。

■『Ｙｅｓ、と言いたいところだが、少し違うんだよ』
■『実は君に折り入ってお願いひとつあるんだ。いいかな』
■『お願いというには違うな、そうだなむしろプレゼントと言ってもいい』

文章が次々と表示されていく。

□『プレゼント？　それはまた嬉しい話だが、請求書と銘打（めいう）たれたものじゃないよな』
■『ひどいな。君はいったい僕をなんだと思ってるんだい？』
□『ふむ……シン・メガミテンセイの制作者、Ｔｗｉｔｔｅｒのフォロワー、
　Ｓｋｙｐｅのチャット仲間、正体不明の小粋なアメリカ人、どれがいい？』
■『個人的な嗜好（しこう）で言えば最後が一番好ましいね。だけどＷｅｂ上とはいえ、
　知り合って数年にもなる相手に対してちょっとひどいじゃないか』

□『そう言いながら画面の向こうで笑ってる顔が見えるぞ』
■『これは大変だ、どうやら僕はこれから盗撮カメラの有無を調べなきゃいけないな』

モニターに示されるやりとりに男は思わず笑みがこぼれる。
聞こえていた調理の音が止まり、食器がテーブルに置かれる音が聞こえてきた。

□『すまないがＳｔｅｖｅｎ、そろそろこっちは雛鳥（ひなどり）がわめく時間だ』
■『おっと親鳥は美味しそうな餌を用意してくれそうかい？』
□『噛まずに飲む込むようなことしたら、俺が食われちまうさ』
■『それはぶっそうな親鳥だね。しっかりご機嫌とっておかないと』
□『こっちは今日で仕事も終わり。明日からゆっくり羽をのばすつもりだ』
■『それは羨ましいな！　といっても僕は仕事より趣味が忙しくてしょうがない』
□『その趣味で仕事より稼いでる人間がよく言う』
■『趣味、趣味、そう趣味だ。ただ命をかけてしまうほどだけどね』
□『いい加減、シリアルだけの生活はやめて、ちゃんとしたものを食べたらどうだ』
■『僕は知ってるぞ、Ｇｉｕｌｉｏ。君がだれよりものぐさなことを』

「これは上手いこと返されたな」

苦笑を浮かべてつぶやいたところで、声が飛んでくる。

「ジェリオーできたよー」
「ああ、わかった」

腰を浮かしながら男は指を動かす。

□『悪いが、親鳥が呼んでる。またあとでな、Ｓｔｅｖｅｎ』

■『待った！　待ってくれ、さっきのプレゼントのことだけ伝えておきたい』

浮かしていた腰を、一瞬ためらったあとおろす。

□『珍しいなそこまでして引き止めるなんて、さてはーー』

■『おっとそれ以上は言わせないぞ。それよりも、だ。Ｇｉｕｌｌｉｏ。

明日、君のもとにひとつ荷物が届く』

表示された文字を見て男は眉をひそめる。

□『Ｓｔｅｖｅｎ……まさかお前にストーカーの趣味があるとは思わなかった』

■『最後まで聞かないでからかうのは君の悪癖（あくへき）だな、Ｇｉｕｌｌｉｏ。

一度お互いに住所を交換して雑誌を送り合ったのを忘れたのかい』

□『もちろん、覚えているさ。お前に幼女へのなみなみならぬ情熱を語られたことを』

■『待て、待て待て！　いいか？　僕は七五三というイベントが詳しく分かる資料を求めたはず。

僕の名誉にかけて言おう。僕はスレンダーな婦女子が好みだと！』

□『有り難い言葉をどうも。それで荷物ってのは？』

背中から無言の足音が聞こえてきたが、男は無視。

■『そう、それだ。君に……テスターをやってもらおうと思って』

「テスターー？」

口に出して言うと、顔の横に長い白髪が迫った。

「なーにーをーしーてーるーのー」

「ああ、Ｓｔｅｖｅｎとチャットしてたんだが、荷物をこっちに送ったらしい」

白髪を垂らす顔は視線をチャットのログへと向ける。

「ふーん、テスターってことはなにかの電化製品とか？」

「どうだろうな」

二つの顔が疑問の色となるなか、モニターは文字を表示していく。

■『テストしてもらうのは……そうだな、悪魔召喚プログラムと名付けよう。

　そのプログラムが入った機械のテストをお願いしたいんだ』

その文章を見て、男は呆れた感じで口を開く。

□『悪魔召喚……プログラム？　おいおいエイプリルフールにはまだ早いぞ？』

■『予想通りの反応をありがとう、Ｇｉｕｌｉｏ。まあなんだ、うまくいったらラッキー。

　駄目なら駄目でそれでいいんだ。むしろ上手く動かないほうがいいんだ』

□『？　言っている意味がわからないな。動かないとテストにならないだろう』
■『こっちの事情という奴があってね。なに、面倒ならそのまま返品してくれてかまわない』
□『分かった、引き受けよう。せっかくのプレゼントなのだからな』
■『サンクス、Ｇｉｕｌｉｏ。それじゃあ、感想をよろしく頼むよ、Ｂｙｅ』

そう言ってＳｔｅｖｅｎのログインを示す表示は、ログオフの無色となった。
椅子に座っていた男は、小さく一息ついて隣の顔を見る。

「悪魔召喚プログラムが届くらしい」
「ぷっ！」

隣の女性は大きく吹き出す。
そのまま笑い声で、

「それって、ジェリオがいつもやってるゲームに出てくるのじゃない」
「そうだ、元々頭のネジが外れてると思ったが、とうとうＳｔｅｖｅｎの奴、頭がイカれたようだ」
「本人はきっと大真面目なんだから、そう言っちゃ駄目よ」
「どうだろうな、送られて来るのはデビル・フィッシュかもしれないぜ？」
「それじゃあ機械っていうのは、真っ赤なデビル・フィッシュを生み出す鍋？」

そう言って二人は笑い、男はＳｋｙｐｅのログイン表示を赤い退席マークとする。

そのまま立ち上がった男と女は、香ばしい匂いが漂ってくる方へと歩き出した。

ドアが閉じられる。

隣の部屋から料理の味について言い合う言葉が聞こえてくるなか、入力がないため光量が弱くなっていたモニターが、強く光る。

【Ｓｔｅｖｅｎ　が　ログイン　しました】

ライブ通信を要請するコール音が数度鳴り、自動応答によって通信がとられる。

モニターに取り付けられていたＷｅｂカメラが起動。

チャットのウィンドウ横に、黒い背景だけを映した画像が表示された。

黒い背景に潜むなにかは、モニター前に人がいないことを確認。

チャットウィンドウに文字が打たれていく。

■『Ｇｉｕｌｉｏ。君を騙す形となってしまったことを許してほしい。

きっと機械は動作するだろう、問題なく、だ。

そのあと、君の身に起こることがなにかは今の僕からは伝えられない。

できれば生き抜いてほしい、そして会えることを願っているよ』

【メッセージ　を　消去　しました】

【Ｓｔｅｖｅｎ　が　ログオフ　しました】

モニターは再び薄い光を放つだけとなった。

第二話　デジタル・デビル召喚

十二月二十九日

ひとりの男が走っている。
時刻は赤い夕焼けよりも夜の闇が空の大半を占めるころ。
息づかい荒く男は人通りの少ない裏路地を走っていく。

「な、なんだよアレ！？　わけ、わけわかんねえ！」

焦りと混乱が混ざった声。
背中には力無く男性に寄りかかる女の姿。

「美樹！　美樹って！　しっかりしろ、しっかりしろよ！」

走る男性の背中は血に染まっていた。
だが、その血は背負う女が流していたものだった。
首もとに噛まれた傷、そこから止まることなく血が流れる。

ただただ、逃げることだけを考える男の背中、徐々に体温が失われていくのが分かる。

「なん、だよっ！　……なんでゾンビみたいなのが、リアルにいるんだよ！」

いつもの道とはちがう、近道となる路地に入っていったときだった。
歩いて数分すると、ゴミ箱を漁る人間が男女の目に入った。
最初はホームレスかと思い、関わらないようにしたが、女が声をかけてしまった。

「くそっくそ！　なんで声なんかかけたんだよ！」
分かっている、女は困っている人間を見るとほおっておけないのだと。
美徳になりこそすれ、それが災いすることなど今までなかった。
今までは。

声をかけた瞬間、振り向いた顔は人間のものではなかった。
肌の肉は削げ落ちて骨が露出し、肌の表面には蛆（うじ）が何カ所も這いずり回っていた。
そして眼は白く濁（にご）り、黒い瞳がなかった。
よく見れば蠅（はえ）が、その人間の周囲を何匹も飛んでいた。

一瞬、その姿にひるんだ女だったが、おびえながら声をかけた。
「もしかして病気なんですか？」と。
痛む足裏と息切れしてきたのをきつく感じながら男は思う。
あのとき、女の腕をひいてでも止めるべきだったと。

異形の人間は、女の掛け声に反応した、口角をつり上げた笑みで。
そのあとは噛まれた女を異形の人間から離すのに必死だった。
離したあとは異形の人間に蹴りを入れて逃げ出した。

「ちくしょう、ちくしょう……！」
後悔だけが胸につのる。
不意に背中で動く気配があった。
「み、美樹！　平気か、大丈夫か？」

男は首だけを回して、女の顔を見ようとする。
瞬間、首もとに噛み付かれた。

「み、き……？」

噛まれた衝撃で、男は地面へと転がる。
転んだ拍子に女は背中から投げ出され、二三歩距離ができあがる。

「あ、ああ？　あああああああ！？」

何が起きてるのか、理解できない、いや理解したくない声が響く。
倒れた女が身体をゆっくりと起こす、いつのまにか身体から流れていた血は止まっていた。
男は首もとの傷をおさえながら、足で地面をかきながら座ったままあとずさる。

「や、やめ、美樹っ美樹ぃぃぃぃぃぃぃぃ……」

女が、顔を向けた。
白く濁った眼、異様につり上がった口端。
男は混乱と恐怖で、口を閉じたり開いたりすることしかできない。

女はにぶい動作で立ち上がり、呻くような声を出して、一歩男へ近づく。
さらに一歩踏み込んでも、男は左右に首をふり、涙をまき散らして嗚咽（おえつ）を上げるのみ。
あと一歩の距離となり、女の伸ばす右手が、男へふれようとしたとき。

炎が、女から生まれた。

轟音とともに女の身体が炎に包まれ、炭へと変じていく。
髪と肉が焼ける臭いが男の鼻へ届く。
突然すぎる出来事の連続に男の意識は限界を迎え気をうしなった。
燃えあがった炎はしばらくすると鎮火し、その背後にいたものをあらわにした。
男とは反対側にいたのは、灰色地のダウンジャケットを着込み、肩に三本足の鴉をのせた男性。

「ヤタガラス、そいつを治してやってくれ」
『御意。ディアラマ』

ヤタガラスと呼ばれた鴉がひと鳴きすると、倒れた男の傷口が淡い光に包まれ治っていく。
男性は倒れた男に近寄ると、懐から白紙の札をとりだし、男の血を指につけて文字を書く。
なにかを唱え、札を空中にほおると札は光のもやを放って消える。

「あんたはここで彼女と喧嘩し、彼女に……そうだな、そばにあった工具で首を叩かれた。
　そのショックで気絶した。そういうことだ」

男性は一度両手の平を合わせて叩く。
すると札から生まれたもやが男へと降りていき、身体へと吸い込まれていった。
その様子を見て、一息ついた男性はジャケットのポケットから携帯電話を取り出す。

「……病院ですか？　匿名の者なんですが、怪我して気絶してる人

がいたんで、
救急車呼んでもらえます？　場所は……」
数分して男性は電話を切り、その場から足早に遠ざかっていく。
肩にのっていた鴉は羽ばたいて空中へと消えていく。
はあ、と吐き出した息を白く染めながら男性は言う。
「久しぶりの帰京だってのに、どうして京都で悪魔が発生してんだ……」
口調には疲れと嫌悪感（けんおかん）だけが含まれていた。

●　●　●

十二月三十日
電話のコール音が聞こえる。
数度してから相手側がとったのだろう、女性の声が話しだす。
「あ、お母さん？　サクラです。……うんうん、今年はジュリオと新年迎えてから帰るね」
楽しそうに話す声に男はうっすらと瞼を上げる。
寝転ぶ顔の上からはブラインド越しの細い光が当たり、まぶしさに眼が細くなった。
男はそのまま光を遮っていた右手をベッド横へと伸ばし、携帯電話を取る。
携帯を開き、時間を確認。
「……もう昼近い」

大きく口を開きあくび。
頭をかきながら起き上がり、肌寒さに身体を震わせたあと、
いつのまにか世間話へと話題をうつした女性の背後を通って洗面台へと向かった。

歯を磨きヒゲを剃り終え、冬用の服装に着替えたのち、女性がいまだ話しているリビングで食事。
白いマグカップから香る珈琲を飲みながら、ベーコンエッグがのったトーストをほおばる。
ひさしぶりにゆっくりした時間だ、男は内心に想いながら珈琲をもういちど飲む。

「うん、分かってる。それじゃあ、また帰るときには連絡するね。じゃあねお母さん」

女性はそう言ってリビングに設置されていた電話機へと受話器をおろした。
ふぅ、と一息ついて女性は男が座る正面の椅子へと腰を下ろす。

「おはよ、ジュリオ」
「おはようサクラ、いまのはお袋さんか？」
「そっ、前にも連絡はしたんだけど、もういちど連絡しとこうかなって」
「ふーん、けどお袋さんはロシア語で、サクラは日本語。
どうしてそれでちゃんと会話ができてるか俺は不思議だ」
「お互いに聞き取りだけはちゃんと出来てるから、他所からみたら不思議よね」
「いやサクラはロシア語も話せるだろ」

いいじゃない、と女性は微笑んでテーブルに置かれた、
黒いマグカップにインスタントコーヒーの粉を入れ、ポットのお湯をそそぐ。
砂糖を二杯、スプーンで混ぜたあと一口。

「うん、おいしいっ」
「俺には真似できないな」
「あたしは甘党なんですーベーだ。
それより、新年はここで過ごすとしていつからウチに行く？」

尋ねられ、男は「うーん」と言葉をこぼす。

「サクラの家行くまえに、航伯（わたる）父さんに会っておきたいんだが」
「そうなると、行くのは四日ぐらいになりそうかな」
「たぶん、そうなる。航伯父さんが家にいてくれたらだが」

男は苦笑。
女性も苦笑を受けて小さく笑い、小さく声を出す。

「ねえ、今年もイタリアには……」
「……」
「……うん、分かった」

男の無言を見て、女性は言葉を切って珈琲に口付ける。
同じく珈琲を舌の上へと流しながら男は思う。

（もう、いまさらイタリアへ帰ったところで居場所なんかないからな）

砂糖のないブラックは舌に苦々しさを強く残す。

その苦さを快いと感じながら男は一気に珈琲を飲み干す。
京都へ出て来てもう十年、一度もイタリアの実家とは連絡を取らず、
そして実家からも連絡は一切なかった。

（伯父さんのことだ、たぶん連絡はしてるはずなのに）

飲んだくれなイタリア人の父親、浪費（ろうひ）ばかりの日本人の母親。
旅行をしていた母親の一目惚れで生まれた男は、
ハーフであることに悩み家庭を省みない家族に嫌気がさして日本へ来た。
そして母親の弟である伯父を頼ったのだがーー

「また、昔のこと考えてるでしょ」

柔らかい声色で作られた言葉が、思考を遮る。

「ん、ああ」
「そんなに考えるくらいなら、いっそ帰ったらいいのに」
「……いまさらどんな顔して帰るんだよ」
「どんな顔して帰っても親は親でしょ？　そしてジェリオはジェリオじゃない」

笑顔を向けられる。
ばつが悪くなったのか男は視線を背ける。

「あ、こら。ちゃんとこっち見なさい！」
「あーあーなにもきーこーえーまーせーん」
「だったら聞こえるようにしてやるっ！」

立ち上がった女性は男の横へと回り込み、

男の耳を両手で広げようと手を伸ばし、男は必死に女性の手を掴んで抵抗。
互いに押しも押されぬやりとりをしている最中、呼び鈴(りん)が鳴る。
音に互いの身体が止まり、男は「呼んでる、呼んでる」と口を動かし、
女性は「ちぇ」と口を動かして玄関へと歩く。
はぁ、とため息をついて珈琲を再度飲もうとして、女性の声が飛んできた。

「ジュリオー宅配便、あなた宛にふたつ来てるー」
「わかったーってことは署名しないと駄目か」
「そっだからペン持って来てー」
「あいよー」

答えたあと、男は自室の部屋へもどり、ペンをひとつ手に取る。
そのまま玄関へ行き、荷物を受け取っている女性の横へ行く。
玄関外にいる配達員が男の姿を認めて言う。

「ジュリオ・カッチーニさんですか？」
「ああ、そうです」
「相田航さんからと、ええっと……スティーブンさんから荷物を預かってきました。
受け取った証としてこちらに捺印かサインお願いします」

受け取った用紙にペンで名前を書き込む。

「それと、サクラ・ワルーエフさん宛にも」
「え、あたしにもですか？」
「はい、イワン・ワルーエフさんからですね」

「もうお父さんったら、もうすぐ帰るのに。ジェリオ、終わったらペン貸して」
「はいよ」
「受け取り確認いたしました。それではありがとうございました」
そう言って配達人は玄関を閉めて立ち去った。
玄関には大小三つの段ボール。

●　●　●

「こっちはワインが三本に、日本酒が五本。そっちは何が入ってる？」
「……おせち」
「は？」
リビングで段ボールの封を開いていた男は、もうひとつの箱を開いていた女性のもとへ駆け寄る。
「……うわ、おせちだ。これ、もしかしてお袋さんの手作りか？」
「……多分、そうだと思う。
今年は新年過ぎてから帰るって言ってあったから、先に作って送ってきたんだと思う」
「いまどき、自宅でおせち作る家庭もないだろ……」
「あたしの両親、日本大好きだから……」
思わぬ内容に脱力したのか女性は、箱につっぷして白い長髪を床に広げる。
はは、と笑って男は言う。
「さすが日本好きすぎて日本に住んでるだけのことあるな」

「もー……おかげで娘のあたしがどれだけ苦労してるのかと」
「……俺と出会ったのも苦労か？」
男はなんとなく問いかけた。
すると女性はゆっくり身体を起こし、俯いたまま男へ向き、右手をかざした。
「ていっ」
力無い音とともに男の頭部へ右手の指をそろえて当てられた。
何度も何度も力がはいらない形で頭部が小突かれる。
「すまんすまん」
男は苦笑しながら女性の手をとって下げ、女性の頭をぽんぽんと叩く。
女性は下げられた手を男性の背に回して、抱きつく。
「……航伯父さんからはワインと日本酒だけ？」
抱きついた姿勢のまま女性が問う。
「そうだな、海外で買ったらしい英文で表記されたワインと、
俺にはとてもじゃないが手が出そうにない上等な日本酒だ。
……借りた学費の返済と礼を兼ねて金を送ってるのに、これじゃあ意味がないな」
「いいじゃない、伯父さんの好意でしょ。ありがたく受け取ったらいいじゃない」
「そんなもんかねー」
「それよりも」

と女性が顔を上げる。
「問題はあれじゃない？」
そう視線を向けた先には、大きな包み。
送り主はＳｔｅｖｅｎとだけあった品物。
「Ｓｔｅｖｅｎが送って来た、悪魔召喚プログラム入りの機械、か」
「思ってたより大きいね」
「だな。もっとちっさいものだと思ってた」
二人は立ち上がり、幅が縦に１ｍ、横に５０ｃｍほどある包みを見下ろす。
男が包みを開くとなかには金属のケースが手前に二つ、奥に二つで合計四つ入っていた。
眉をひそめ、男はケースのひとつを手に取る。
「ひとつじゃないのか？」
「ねっそのケース、８桁のナンバーロックかかってる」
「ほんとだ……サクラ、そのなかにバスが書かれた紙とかないか？」
「うーん……駄目、見つからない」
「盗難対策のためか？　Ｓｔｅｖｅｎに聞かないと駄目か」
「あれ、ジェリオが持ってるケース以外は鍵も見当たらないよ？」
「んん？　あいつどういうつもりなんだ？」
立ち上がった男は自室へと向かい、ＰＣのスリープを解除する。
女性も持っていたケースを下ろし後ろをついていく。
マウスを操り、チャットソフトを起動。
Ｓｔｅｖｅｎがログインしているのを確認して、男はチャットを開

始した。

□『昼過ぎだが、おはようＳｔｅｖｅｎ。早速だが質問がある』

■『やあ、Ｇｉｕｌｉｏ。その様子だと届いたみたいだね』

□『エスパーな友人を持って嬉しいよＳｔｅｖｅｎ。でだ、あのケースの群れはなんだ』

■『言ったじゃないか、プレゼントって』

□『日本じゃあ送るプレゼントは１人につきひとつと決まってるんだ。お前は四人いたのか？』

■『まさか！　もしも四人いたら、仕事は全部三人に任せて、僕は四六時中趣味に打ち込んでいるさ』

□『さすが趣味に命かけてるだけあるな』

■『はは、言われると恥ずかしいね』

隣で女性が吹き出す。

□『で、盗難防止かと思うがケースの解除ナンバーはなんだ？』

■『Ｇｉｕｌｉｏ、せっかくのプレゼントだ。開けるのも楽しんでもらいたいと思ってね。

　先の４桁は西暦、後の４桁は月日を入力すれば開くよ』

□『つまりはクイズというわけか、問題はなんだアナウンサー』

■『意欲的な回答者で嬉しいよ。日本の石川県、七尾市が制定した「香りの記念日」。それが答えだ』

□『？　変なことを知っているんだな、Ｓｔｅｖｅｎ』

■『僕は君と知り合う以前から日本のフリークなんだよ。ちなみに検索してもかまわないよ』

□『遠慮なくそうさせてもらう。そうだ、鍵穴の見当たらない残りのケースはなんだ？』

■『そのケースは時間指定で開くようにしてある。新年をお楽しみに、Ｇｉｕｌｉｏ』

□『また凝った仕掛けをしたもんだな、Ｓｔｅｖｅｎ。おかげでお返しをどうするか楽しくなってきた』
■『ああ、そうだ。ケースを開いたあと機械を操作するのはＧｉｕｌｉｏ、必ず君がやってくれ』
□『わざわざご指名か、嬉しくない予感がするな』
■『なに、機械の操作上本人確認が必要なだけでね。おっとそろそろ僕は用事があるから出るよ。
　新年までは連絡が取れなくなるだろうけど、泣かないでくれよ？』
□『わかった、Ｓｔｅｖｅｎ。今日限りでおまえのことは忘れるよ、ああ良い奴だった』
■『相変わらず酷い返しがあったもんだ。それじゃあ良い年を、Ｂｙｅ』
□『そっちも良い年を、Ｂｙｅ』

Ｓｔｅｖｅｎがログオフとなってチャットが終了。
男はそのままマウスでブラウザを起動し、先ほどの記念日を検索。

「サクラ、香りの記念日って知ってるか？」
「ううん、聞いたことないけど、そんな記念日あったんだ」
「あったみたいだな、日本生まれ、日本育ちのロシア人が知らない記念日が」
「Ｓｔｅｖｅｎって本当謎よね、一体どうしてそんな日本のことに博識（はくしき）なんだろう」
「さあ、なっと。さて検索結果は……１９９２年１０月３０日、サクラ数字を入れてみてくれ」
「分かった、１、９、９、２。１、０、３、０っと」

ベッドへケースを置いた女性は、鍵の数字を動かす。
最後の数字を動かし終わった瞬間、留め金が外れる小さな音が響い

た。
女性は横へと移動し、男はケース前へと片膝を着いて座る。
「さて、一体なにが入っているのか……」
金属のケースが、ゆっくりと、開けられた。

●　●　●

「これは……スマートフォンっぽいが、こっちはベルト？」
開かれた金属ケースのなかには、横１５ｃｍ、縦６ｃｍほどの携帯電話らしきものと、
その携帯電話らしきものを収める台、に短いベルトがふたつ付いていた。
説明書のようなものは見当たらず、携帯電話らしきものを取る。
「片側は一面液晶だけ、横にスイッチがひとつ、もういっこはカメラか？
　あとはＵＳＢがつながる部分、裏側は金属っぽいが……ん？」
裏側を見て男が気づく、そこには”Ｃｒｅａｔｅｄ　ｂｙ　Ｓｔｅｖｅｎ”と刻印された文字。
「わざわざ名前まで彫るなんて凝り過ぎだろう」
「これ、一体いくらしたんだろうね」
横の女性が物珍しそうに携帯らしきものを見る。
「さあ、な。けどやたら稼いでるっぽかったから、何百万もかかっ

てたりしてな」
「ひいいいいいい、そんなの怖くて触れなーい」
「変なところで恐がりだなサクラは」
小さく笑って男は携帯らしきものの横についていたスイッチを長押しする。
「スマートフォンと同じようならこれで起動するはずだが……」
数秒押したところで液晶に光がともる。
青白い光が、液晶にひとつの形を作っていく。
その形は二重の円に囲まれた六芒星。
隙間になにかの文様を表示しながら、六芒星(ろくぼうせい)が消える。
液晶の左上に文字が表れた。
【悪魔召喚プログラムＶｅｒ．１．００を　起動しています．．．】
一瞬の表示、後。
【悪魔召喚プログラムを　起動しました】
【ユーザー登録を　行います】
【ユーザー名：Ｇｉｕｌｉｏ・Ｃａｃｃｉｎｉ　で間違いなければ
　右の空白に　親指以外の指を押し付けてください】
その表示後、文字列の右側に四角いマスが表れた。
少し迷ったあと、男は指をマスへと押し付ける。
【指紋読み取り中．．．指紋読み取り中．．．指紋読み取り中．．．
登録完了】
【指紋登録が完了しました　続いて声紋(せいもん)登録を行います】

「声紋登録？　そんなことするのか」
「まるで犯罪者の登録みたい」
「変なこと言うな」

【「あ、い、う、え、お」を　高い声　低い声　普段の声　で発声してください】

「三回も言うのか……サクラ、ちょっと耳閉じてろ」
「えーちゃんと言えてるか聞いててあげる」
「……」

言っても無駄と思ったのか、わずかな無言ののち、男は声を出す。
途中エラーが出たため、都合5回声を出すこととなった。
女性は隣で笑いを押し殺していた。

【声紋データ登録中・・・　声紋データ登録中・・・　声紋データ登録中・・・　登録完了】
【最終登録を行います】

「まだあるのかよ……」
「がんばれがんばれ」

【生体マグネタイト波長パターンを　確認します】
【右の空白に　手の平を押し付けてください】

「生体マグネタイト波長、パターン？　なんだこりゃ」
「波長っていうから、鼓動とか？」

互いに疑問をうかべたまま、男は戸惑いながら右手の平を液晶に押

し付ける。

【波長パターン確認中・・・波長パターン確認中・・・波長パターン確認中・・・確認および登録完了】

【なお本体のバッテリー維持のため　微量（びりょう）の生体マグネタイトを徴収します】

「えっ？」

なにかを言おうとして男は突然の目眩（めまい）に襲われる。

「ジェ、ジェリオ！？　なに、どうしたの？」

「……わからん。大丈夫、もう治ったみたいだ」

「ほんとに？　ほんとに平気？」

「ああ、ちょっと寝過ぎたのかもしれないな」

軽い冗談を口にしながら男は気怠さを感じていた。

機械の表示が終わった瞬間、身体から力が抜けた感覚があった。

いまのは、と口にはせずに疑問だけを胸に秘めた。

心配そうな顔をしている女性に笑い顔を送って、男は視線を戻す。

【全ての登録　および　マグネタイトの補充が　完了いたしました】

【ようこそ　Ｇｉｕｌｉｏ・Ｃａｃｃｉｎｉ　悪魔召喚の世界へ　ようこそ】

二度繰り返される「ようこそ」の表示に男は制作者のユーモアを感じた。

テキスト表示が消え、液晶にはアイコンがいくつか浮き出る。

それぞれ【悪魔召喚】【悪魔確認】【悪魔合体】などのアイコン名も付いていた。

「すごいな、本当にシン・メガミテンセイのプログラムとそっくりじゃないか」
「ねね、ちょっと触っていい？」
っと男が答える前に女性は【悪魔召喚】のアイコンを触れる。
が、機械は反応しない。何度押しても反応しない。
「指紋登録したから、俺以外は触れないんだろ」
「ええー」
「がっかりするなって、で試しに悪魔召喚でもしてみるか」
「本当に悪魔が出てくるのかな」
「どうかな、実際はそれっぽい表示がでるだけじゃないか？」
【悪魔召喚】のアイコンをタッチ。
液晶画面が切り替わり、無記名のリストがずらっと並んだ。
無記名ばかりのリストの一番上、男の視線が止まる。
【妖精（ようせい）　ジャックフロスト】
「こいつは知ってる奴だな」
雪の妖精ジャックフロスト、シン・メガミテンセイにも出てくる悪魔。
雪だるまのような顔に悪魔のような帽子と首かざりをしていて、
特徴的な語尾をもった話し方はゲーム仲間にもファンが多い。
妖精の名前部分をタッチ、すると【召喚しますか】の問いかけ。
ＹＥＳを選択した瞬間、液晶画面に再び六芒星が表れた。
しかしその光は強い。

周囲が暗くなるほどの強い光に、男と女性は顔面を腕で覆う。
数瞬の後。
青白い光はおさまり、画面にはひとつのテキスト。
【悪魔召喚が　成功いたしました　以後召喚シークエンスを　簡略(かんりゃく)いたします】

「おいおい……ただの演出にしては派手すぎだろう」
「び、びっくりしたー」
『ほんとほんと、オイラもびっくりしたホー』

「えっ」と同時に声を出して振り返る二人。
目の前には薄いもやがかかった姿の【妖精　ジャックフロスト】が、男の知っている姿のまま、空中に、浮かんでいた。
その口を笑みにとがらせて。

第三話　混沌への幕開け

振り向き、驚いた顔で見る男と女性、二人の視線の先にいたのは、青白い靄（かすみ）のかかった【妖精　ジャックフロスト】の姿そのものだった。
妖精は笑みのまま浮かんでいたと思いきや、自分の姿を見下ろし、はたと気づく。

『ヒ、ヒホー！？　なん、なんだこれ！　ちゃんと具現化してないホー！？』

じたばたと空中で手足を動かすが、妖精は自らの手で青白い身体を触ろうとして触れない。
呆気にとられていた男と女性だったが、しばらくして表情がもどる。
目の前で慌てた様子でいる妖精をしばし難しい眼をして見つめ、男が口を開いた。

「おい……ジャックフロスト、だよな。お前」
『お？　なんだホー！？　もしかしておまえがサマナーか！　ちゃんと召喚しろホー！』
「ちゃんと召喚……？　なにいってるんだ、俺はちゃんと召喚したぞ」

やや怒気の混じった高い声に押されながらも男は先ほどの様子を思い出して告げる。

「機械には召喚は成功したとある」
『な、なんだってホー！？　じゃあ、どうしてこうなってるか、わからないってホー！？』

「ああくそ、ちょっと待て、いま調べる」

そう言って手元の機械を操作する。
召喚できる悪魔のリスト画面を見れば、画面上部には【ヘルプ】と書かれた文字。
タッチすると項目がいくつか表示されていく。
男の眼が上から下へと動く横、妖精が男の周囲を回り出す。

「……」
『ま、まだホー？　もうすこしホー？　どうなってるホー？』
「ホーホーうるせえ！」
『ヒィ！　そ、そんな起こらないで欲しいホー！』

思わず睨み込んだ男の後ろで笑う声。
妖精と男、ともに笑い声へ眼が向けば、女性が手元を隠して震えている。

『……オイラ、なにかしたホ？』
「サクラ……おいサクラ」
「ご、ごめんジェリオ。その、うん、ぷふっ」

笑いを隠しきれていない姿と声に場が落ち着きを得る。
男は苦い顔で髪をかきながら、妖精に面を向ける。

「ちょっと落ち着け、ちゃんと調べてやるから、な？」
『わかったホー』

妖精もどうしたのものかと頬をかきながら頷いてみせる。
再び男は機械の画面へと眼を向け、ヘルプ項目をスクロールしていく。

数秒してから眼がとまり、今度は視線が左から右へと流れる。
注視している項目は【マグネタイトについて】。
「……ええと、悪魔召喚する際、周囲空間の含有(がんゆう)マグネタイトが召喚対象の求める、
必要マグネタイト量に足りていない場合、緊急措置として劣化(れっか)状態で召喚されます」
『れ、劣化状態だってホー！？』

ひどくショックを受けた様子となって妖精は空中にうなだれる。
その様子にどう声をかけたものか、悩む男。
聞こえるのは好奇心を隠さない女性の声。

「ねえねえ、君悪魔なの？」
『ホ？　そうだホーこんなナリだけどオイラれっきとした悪魔だホ！』
「うわーすごーい！　こんな可愛い悪魔がいるんだー」
『か、かわいいってオイラこうみえても男の子なんだけど……』
「いいじゃない、可愛いのはお得よ！」
『おとく、なのかホー？』

うんうん、と女性が笑顔で頷いている横、
呆れた表情となっている男は一度、咳(せき)をして口を開く。

「あーおい、立体映像とかじゃなく、お前本当に悪魔なんだな」
『召喚しておいて言うことかホー』
「いままで悪魔なんてもん、見たことがなかったんでな」
『ふーん？　なんかサマナーのくせに変な奴ホー』
「さっきからサマナーサマナー言ってるが、なんだそれは？」
『そんなことも知らないのかホ？』

両腕を組んで得意げな顔となる妖精。

『悪魔を召喚する機械、ＣＯＭＰをあやつり悪魔を使役(しえき)する者、それがサマナーだホ』

「……デビルバスター、じゃないのか？」

『なんだホそれ』

男は内心に思う。

（シン・メガミテンセイと違う？）

そして先ほど聞いたいくつかの単語を思う。

「ＣＯＭＰ、というのかこの機械は」

『？　おまえそんなことも知らないホ？　ドシロートっていう奴ホ！？』

馬鹿にするような口調に、男のこめかみに血管が浮く。

「もういい、お前は機械にひっこんでろ」

『あああああ、まてまってまつんだホー！！！』

機械の【悪魔送還(あくまそうかん)】を押そうとして妖精が慌てて止めに入る。

『こ、こう見えてもオイラ役立つホ！　魔法も使えるし、色々お得ホ～』

「え、君魔法も使えるの！？　見せてみせて！」

「おいサクラ……」

止めようとしたが、女性は「いいじゃない」と言って聞かない。
『じゃあお披露目するホ～！　よく見てるホー！』
妖精の声とともに辺りが静かとなる。
集中するかのように瞼を閉じた妖精は、両手を振り上げ勢いよくおろしながら言う。
『そぉ～れ、ブフ！』
青白い姿の妖精は両腕を前へと突き出した姿勢。
静かな、沈黙だけが部屋のなかを過ぎ去る。
窓にかかるブラインドは微動だにせず、照明も変わらず光を放ち、暖房もきいている。
周囲には、なにも変化が起きていない。
口端をひくひくさせながら妖精は、
『ブ、ブフ！　もいっちょブフ！　そんでもってブフ！　あ、そ～れブフ！』
幾度と無く叫びながら指をさしたり、拳をつきだしたりするが、なにも起こらない。
男は無言で機械を操作しようとする。
『まままままってホー！　これはきっとアレだホ！
さっきのほら、マグネタイトが足りないってやつのせいだってホ！』
半目になった男の視線が妖精に突き刺さる。
横から女性がなだめるように言葉を出す。

「あんまりいじめちゃだめよジェリオ」
『きれいなオネーサンのいうとおりだホー！』
「ちっ……」
『いま舌打ちしたホッ！？』

ええい、とつぶやき、男は視線をぶつけなおす。

「お前が本物の悪魔なのか、Ｓｔｅｖｅｎが仕込んだ立体映像かはわからんが」

赤みがかかった焦げ茶色のくせ毛をかきながら、男は立ち上がり、言葉を続けた。

「俺の名はジェリオ・カッチーニと言うんだ、お前とかサマナー呼ばわりはするな」

座っていた女性も金髪に近い白い髪をなおしながら立ち上がり、男の言葉に続く。

「あたしはサクラ・ワルーエフ。ねえねえ悪魔くん、君のお名前は？」

空中を浮遊する青白い姿の妖精は喜んで答えた。

『オイラは霜の妖精、ジャックフロストだホー！』

●　●　●

キーボードを軽くたたいて、マウスを動かす男の姿がある。

目線はディスプレイへとむかっており、画面には「ジャックフロスト　妖精」が検索されたページ。
いくつかのサイトが表示されたページのうち、適当なのをクリックして飛ぶ。
男の眼が左から右へとうごき、脳へと文章を送っていく。

「イングランドの、民間伝承として伝えられる存在、か」

背後をちらりと見れば、そこではベッドに腰掛けた白髪の女性と青白い妖精が談笑している。
名乗り合ってからいくつかの会話を経ていくうちにわかったことがあった。

ひとつ、妖精はとある人物にたのまれて機械のプログラム内に封じられていた。
ふたつ、とある人物とは自らをスティーブンと名乗っていた。
みっつ、無事に召喚されたときは召喚主を助けるようたのまれていた。

珈琲の苦い味が口内にひろがっていく。
思考を止めないまま、男はキーボード横においた、ＣＯＭＰと呼ばれた機械を見る。
見た目や内蔵するプログラムの類いはまさに、

「シン・メガミテンセイそのものだが……」

喚び出された悪魔はこちらの知らない単語で呼んでいた。
サマナーにＣＯＭＰ、どちらもゲーム内では一切見なかった呼称だ。
気になってＷｅｂで検索してみるものの、男の望むような情報はまるで出てこなかった。

「悪魔たちの常識、つか常識があるか知らんがその世界での呼び方なのか？」

腑に落ちない、雪だるまのような姿をした妖精が嘘や騙(かた)るそぶりはすくなくともなかった。

妖精は当たり前のように機械をＣＯＭＰ、召喚者である男をサマナーと呼んでいた。

「ぜんぜんわからん」

あきらめて椅子をまわしてベッドへと向く。

白髪の女性と妖精は楽しそうに話している。

「俺が悩んでいるのに楽しそうな奴らだな」

「んー？　だったらジェリオもこっちで話したらいいじゃない」

『そうだホーなにむずかしそうな顔してるホー？』

「お前のようなわけわからんのを目の前にしてるからだ」

半目となって睨む。

『ヒィィィィィ、サクラちゃーんサマナーがいじめるホー！』

「大丈夫大丈夫だよーこわいこわーい人はほっておこうねー」

「たくっ……つかお前、名前呼ぶつもりぜんぜんないな」

『サマナーこそオイラのことおまえ呼ばわりじゃないかホー』

「いちいちジャックフロスト、なんて呼ぶのはめんどうだ」

「それだったら名前つけてあげたら？」

思い立ったように女性が言う。

「名前？」
「そ、だってこの子のジャックフロストって言うなれば通称でしょ？」

だったら、

「もっと親しみこめて呼べるようなネームをつけてあげようよ、ね」
『ヒーホー！　さっすがサクラちゃんオイラうれしくてとろけそうだホ！』
「……ホーホーうるせえからＧｕｆｏ（グーフォ）でいいだろ」

その言葉に女性と妖精が静かになる。

「な、なんだ。なにだまってるんだ？」
「……ジェリオってときどきセンスがいいのか悪いのか分からなくなる」
『もっとひどい名前を想像してたけど、意外だったホー』
「お前らな……」

呆れた顔となる男を尻目に女性は妖精に向く。

「よぉっし！　ちょっと悔しいけど君の名前はグーフォでいいかな？」
『わるくないホーそれどころか今ちょっとサクラちゃんに呼ばれて嬉しいホー』
「あーもう調子のいい奴らだな」

再び談笑へと転じ、今度は苦笑顔で男も混じり出す背後。
キーボード横に置かれていたＣＯＭＰの液晶が静かに輝く。
その液晶画面には、

【妖精　ジャックフロスト：固有名　Ｇｕｆｏ　を登録】

とあった。

●　●　●

十二月三十一日　午前三時過ぎ。

灰色地のダウンジャケットを着込んだ男が大きな通りを歩いている。
男が歩きすぎた通り名を示す看板には『堀川通り』とある。
口元からは薄く煙りがあがる煙草をくわえながら男は、
目つきはするどく、歩く身体の動きはわずかな緊張で張っている。

道を照らすのは街灯だけ。
ときおり、どこかから騒ぎ立てる声がひびいてくる以外、ちかくには人気がまったくない。
たまにタクシーが排気音をたてて通り過ぎていく。

『一条通り』と書かれた看板の下を歩き過ぎたところで男の足は止まる。

「おかしい……どうして結界がねえんだ」

視線が睨む先は一条通りよりも北、石造りの鳥居がたてられた神社。
そこは安倍晴明を奉る神社。
京都においてもっとも大きな敷地を有する神社のひとつ。

男は足を動かし神社へと近づいていく途中、煙草を口から捨て足裏で火を消す。

近づくにつれて鳥居がせまってくる。

「……」

男はただ無言。

白い息を吐いて、鳥居の前へと立つ。

「何年振りになるんやら……」

小さく、消えるぐらい小さくつぶやき男は鳥居をくぐって境内へと足を踏み入れた。

違和感。

「！？　これは！」

ジャケットに突っ込んでいた両手を出して男は身構える。

鳥居の外からは一切匂わなかった血の香り。

だが、鼻に香るのとは別に肌を刺すものがある。

殺意（さつい）の残滓（ざんし）。

「……なにがおきてんだ。くそっ」

舌打ちとともに男はダウンジャケットの前を開き、

内側より二本の管を取り出し言う。

「出てこいヤタガラス、オンコット」

言葉とともに二本の管から青白い光が発し、男の前方へと大きな光

がふたつ現れる。
ひとつは空中へ翼をはためかせる三本足の鴉。
もうひとつは朱の体躯に白き髪、金色の冠をいただき、大振りの剣を持つ猿。

「ヤタガラスは周囲の警戒、オンコットはついてこい」

鴉は鳴いて応え、猿は頷いて男についていく。
歩きながら男はジャケットの懐から文様が書き込まれた札をいくつかとりだし、
参道の周辺を左右に見ながら進む。
賽銭箱のある本殿前へとまで歩いたところで、
男が石畳の参道から外れ本殿横へと歩んでいこうとしたとき、
上空をとんでいた鴉が鳴く。

鳴き声に眉をひそめ、男は駆けだす。
その背を鴉と猿が追う。
境内は不気味なまでにしずまりかえっており、男の足音だけが響く。
砂利をかくようにして走る先、見えてくるのは本殿裏にある視線隠しの樹々の奥。
晴明神社をあずかる神主の家族が住まう邸宅、そこに明かりはない。
邸宅へ近づくにつれ男は肌を焼く殺意の濃さに総毛立つ。

「くそがっ」

吐き出す息は白く、冷たい空気だというのに冷や汗が男の背を流れる。
見えてくる二階建ての邸宅、その玄関口前で倒れ伏している姿がひ

とつ。
女が白い装束(しょうぞく)を着て倒れていた、真っ赤な血を流して。
白い息を吐きながら男は倒れた女の近くへ駆け寄る。
座り込み、うつ伏せとなっている女の身体に手をかけ、
「おいっ！　生きてるか！？」
身体を起こそうとして首から上だけが地面に伏したままとなった。
絶句する男の目前、力ない身体は堅くなっており、首からの血は固くなっていた。
追いついた猿は男が触れている身体を見て言う。
『首を断(た)ち切られておるな。見事なものだ』
「……おい、ヤタガラス」
『なにか、我が主』
「近くに悪魔の気配、それと生きてる人間の気配はあるか」
鴉は飛ぶのやめ、立ち上がった男の肩にとまる。
『近くに悪魔の気配無し。人の気配も無し』
「くそったれが」
悪態をつき、男は猿をつれて邸宅内へと入る。
そこには血一色となった舞台が整えられていた。
天井、壁、床、なにもかもが血に染まったまま。
強い、歯ぎしり音を男が鳴らす。
靴をはいたまま、邸内へはいり歩いていくと血に混じっていくつも

の肉片、骨片。
ときには内蔵がぶちまけられ、異臭（いしゅう）と腐臭（ふしゅう）がいりまじる。
数分歩いたところで、男は邸宅の一番奥にある部屋へとつづく場所に立つ。

部屋と通路を隔てるふすま、そのふすまが切り裂かれていた。

何も言わず男はふすまをよけ、室内へと踏み込む。
血を吸った畳が湿った音をたてる。
円を組むように敷かれた座布団の上には、首のない身体が座布団と同じ数だけあった。

いくつかは後ろへ倒れており、なかには驚いたように手をのばす姿もあった。

「一族が集まったところを狙いやがったか……」

つぶやきとともに男は視線を、円に敷かれた座布団の上座に向ける。
首より上がないため判別しづらいが年老いた男と思わしき身体。
無表情でいた男は、薄く口を開き乾いた声でつぶやいた。

「親父……いったいなにがあったんだ」

血に染まり、だれひとりとして動く者のいない部屋のなか、
ダウンジャケットを着た男の疑問だけがこだました。

●　●　●

十二月三十一日　午後十一時過ぎ

リビングのソファーでうとうとしていた男は、ずり落ちかけて眼が覚める。

「う、ん？　ああ、寝てたのか俺……」

目元をこすり、伸びをしつつ焦げ茶色の髪をかきながら男は壁の時計を見る。

「ふあああああ、ってもう年明け前か」

そのままキッチンが一緒になったリビングを見渡す。
キッチン前にあるテーブルでは両腕をまくらに寝息をたてている白髪の女性。
女性の上付近でふよふよ浮いている青白い姿の妖精。

「悪魔でも寝るのか」

まぶたを閉じて空中で横になっている妖精を見て、笑いが出る。
立ち上がり、男は寝室兼仕事部屋から毛布を持ち出し、寝ている女性の肩へ掛ける。
掛けてからキッチンへと向かい、流し台近くに置かれた電気ポットに水を入れスイッチオン。
もう一度身体をのばし、腰を左右にふれば小気味良い音が鳴った。

「新年明けたら一度風呂に入るか」

流し台に腰を預け、テーブルへと向き直る。
寝息をたてている女性に視線をあわし、笑みが浮かぶ。

「相変わらず気持ち良さそうな寝顔をしてるな、サクラは」

言ってるあいだにお湯が沸き、ポットへ身体を向けて男はマグカップに珈琲の粉を入れお湯を注ぐ。
鼻にただよってくる珈琲の匂いに意識がはっきりしてくるのを感じ、マグカップを持って女性が座っている対面の椅子へと座った。

立ち上がる湯気と香り、そして口内に流れる珈琲の味と温かさを男はゆっくりと味わう。
静かで、それでいて満ち足りている、そんな気持ちを男は覚える。
頭上を流れていく妖精を眺めながら思うのは、

（最後に変なこともあったが、今年もいい年だったな）

壁に掛けられた時計の時を刻む音が部屋にひびいていく。
なにをするでもなく男は椅子の背もたれに背を預け、ぼんやりとした顔で空中を見つめる。

（このまま仕事を続けて、サクラと同棲（どうせい）しつづけて、いつかは結婚して……）

想いを先へと馳せる。
生まれた場所ではない異国の地に住み、そして得た相手。
幼い頃にはまるで想像しなかった現在に、男は思う。

（恵まれすぎてる、なんて言ったら怒るだろうなサクラは）

思い、もういちどマグカップにくちづけようとして、手が止まった。

「ん？」

視線が空中をただよっている妖精にとまる。
青白い靄(かすみ)がかかった姿に異変が起き始めていた。
身体の部分部分に電流が走るかのような光が発しだす。
バチッバチッと鈍い音がたち、音が連続していく。

「おいおい、なんだどうしたんだ」

口づけようとしたマグカップを置き、男は焦った表情で立ち上がる。
そうしている最中にも妖精の身体は光に包まれていき、
時計の秒針と長針と短針、その全てが十二をさした瞬間。
室内を光が、覆(おお)った。

●　●　●

一月一日　午前零時零分零秒

両腕で光を遮るようにしていた男は、閉じていたまぶたをゆっくり開き、
光を放った源である妖精をゆっくりと見る。
腕をおろした先、眼にうつったのは先ほどまでとは違い、青白い靄(かすみ)のない、
はっきりとした姿となった妖精の姿。

「なんだ……？　グーフォの姿が、しっかり見える？」

合っているのかどうかもわからないため疑問系でつぶやきが出る。
いままでは青白い霧のかかったような薄い姿であったのが、
照明の光を反射し、眼に見えて質感がわかる姿となっていた。
自身の異変に気づいたのか妖精は瞼をひらく。

『んん？　なんだホー？　なんか身体の調子が……』
目の前に手を伸ばしながら言っていた言葉が途中で途切れる。
手を見ている格好で動かなくなった妖精を見て、男は手を伸ばしながら言う。
「おい、グーフォ。お前の姿、はっきりしてるんだが」
男の言葉に妖精はぶるぶる震えたあと、
『ホー！　ちゃんと具現化したホー！　やったホー！』
歓喜（かんき）の声で叫びをあげた。
「……んぅ、なーにどうしたのー？」
叫びにつられて女性が眼を覚ます。
『サクラちゃーん！　見て見てーオイラのこのプリティボディをー！』
「え？　あ！　ちゃんと触れる！　なんでなんで！？」
『きっとマグネタイトがこの辺りいっぱいになったからだホー！』
「よくわからないけど、よかったねー」
『よかったホー！　これできっとオイラの魔法もちゃんと使えると思うホ』
「おおーついにグーフォの魔法が見れるんだーってジェリオ……どうしたの？」
手をつなぎあって喜んでいる女性と妖精の横、男はつぶやく。

「マグネタイトが、この辺りいっぱいになった？」
男はその言葉の意味を考える。
今のいままで霧がかっていた妖精の姿が突如（とつじょ）確かなものになった。
それはＣＯＭＰのヘルプにあった召喚対象の必要マグネタイト量が足りたため。
（なら、そのマグネタイトはどっから？）
答えのひとつはＣＯＭＰを起動したときの記憶にあった。
（あの機械は起動時に微量（びりょう）の生体マグネタイトを俺から取った、ということは）
悪魔の身体を構成するマグネタイトは人間から得られる。
シン・メガミテンセイでも同じ仕組みであったのを思い出し、
さらに男はゲームでのことを記憶から掘り起こす。
（確か、ゲームでは魔界への通路が開かれたことで悪魔が世界に溢（あふ）れたとあった）
つまり魔界には悪魔を構成するマグネタイトが豊富にあるということ。
そこまで考えて男は頭を振る。
（馬鹿か俺は、魔界なんてのはゲームの設定だろ、現実に有る訳が無い）
心配するように男を見る女性と妖精に、大丈夫だと返して椅子に座

ろうとして、
警報音にも似た高音が突如室内を切り裂いた。
「なんだ！？　どっからだこれ！」
「ジェリオ！　これ、このケースからだよ！？」
「Ｓｔｅｖｅｎが送った余りのケース？」
いまだ玄関近くに置かれていた三つの金属ケース、音の発信源はそこからだった。
慌てて男と女性がケースに近づいていくと、やがて警報音は止み、何か鍵の外れる音が響いた。
段ボール箱に入れてあったままのケースを取り出し、床へと置き開く。
「……これは」
男が開いたケースの中身、そこにあったのは銃、そして数種類の弾薬。
「ジェ、ジェリオ、こっちも銃が入ってる、けど……」
隣で女性が開いたケースにはマシンガンと弾薬。
互いに驚きと不安を隠せないまま、最後に残ったケースを男が開いた。
なかには何色もの大小さまざまな光沢のない石が入っていた。
『これ知ってるホー魔法石ってやつだホー』
「魔法石……まさか、ゲームにあったやつか？」
思い出すのはゲームにあった魔法の代用となるアイテムの存在。

魔法の名が与えられたストーンは使用時に叫ぶことで発動させることができるのだと。
口元を歪めながら、男は苦々しく言葉を漏らす。

「Ｓｔｅｖｅｎ、ジョークにしてはやりすぎだぞ」

いったいどういうつもりでこんなものを送ったのか、
そう問いただそうとして男は仕事部屋へ向かいＰＣの電源を入れる。
ディスプレイに光がうつりチャットを起動、だが。

「！？　どうなっているんだ？　Ｗｅｂにつながっていない？」

画面にうつるのはアカウントがログインできていない無色マーク。
自分だけでなく知り合いのアカウント全てがログオフ状態。
まさかと思い、Ｔｗｉｔｔｅｒを見ようとするがやはり見れない。

「サクラ！」
「な、なに！？」
「電話だ！　電話をどこでもいいから、電話をかけてくれ！」
「わ、わかった」

ケースそばにいた女性は、戸惑いながら立ち上がりリビングの固定電話へ向かい受話器を取る。
そのまま外線ボタンを押すが、反応がない。
えっとなった女性はそれでもボタンを押す、しかし一向に切り替わらない。

「ジェリオ！　電話つながらない！」
「こっちも駄目だ！　携帯もつながりやしない！」

携帯電話をもったまま男はリビングへ戻り、今度はリモコンを手にとってＴＶへ向けた。
が、電源は入っても何も映らないまま。
「ＴＶが映らない……Ｗｅｂもつながらなくて、電話も通じない……」
「ね、ねえジェリオ、なに、なにが起きてるの」
「わからないが、明らかに異常だ」
怯えたように震える女性を見ながらも男は考える。
新年を迎えた瞬間、全てがおかしくなった。
『サクラちゃん大丈夫だホーオイラがついてるホー！』
「……うん、ありがとうグーフォ」
女性を励ますように元気な声を出す妖精。
二人のやりとりを見ながら男の脳内には最悪の想像が浮かぶ。
冗談だ、有る訳が無い、そう内心にいくつも否定をしながら男は妖精に尋ねる。
「な、なあグーフォ、もしかしてお前の同類が近くにいたりしない、よな」
男は願った、いないと答えてくれるのを。
『？　サマナーどうしてわかるんだホ？』
「！！！！！」
最悪だ、その思いだけが胸を占めた瞬間、

【警告　警告　半径５ｍ内に　敵性悪魔の反応を　感知しました】

隣の部屋からビープ音とともに電子音声が聞こえてきた。

「！　そうかＣＯＭＰがあった！」

急いでとなりの部屋へ向かおうとした矢先、ガラスの割れる音。

追随するのは鳥類と思わしき長く伸びる甲高い鳴き声。

背後で怯えすくむ女性の声が聞こえ、男は戸惑い顔で部屋の入口で立ち止まる。

眼の前には両手が翼と化し、足先は三つの爪となった女がいた。

『イタイタイタ、オイシソウナニンゲン！』

口を大きくひらき、長い舌をはいずらせる顔に男は立ちすくむ。

同時に翼が起こす風で前へと進むことも出来ず、男はなにもできない。

翼を生やした女は一度大きくはばいたあと、爪を男へ向ける。

風と恐怖で足が動かない男。

ゆっくりと、ゆっくりと近づいてくる爪を前に逃げることもできない。

なにも思うことも考えることもできず、目の前から眼をはなせない。

あと一息で爪が顔にかかる、そう思った瞬間、背後の空気が、冷えた。

『イベリャアアアアアアアアアアアアアアアア！？！？』
甲高い叫びとともに翼を生やした女は腹部に氷塊（ひょうかい）を食らって吹っ飛ぶ。
そのまま女は氷塊ごと窓の外へと飛んでいき、落ちていく。
なにが起こったのか分からず呆気にとられた表情の男。
『まったくダメダメなサマナーだホーあんな奴にびびるなんて』
暢気（のんき）な妖精の声が頭上から聞こえてきた。
「いま、の……お前が？」
ひねり出すようにして出た掠れた声で聞く言葉に、妖精は自慢げに応える。
『もっちろんだホー！』
「本当に、役立つとはな」
『な、助けられておいてなんていいぐさだホー！』
無理矢理苦笑して男は震える足に力をいれ、ＣＯＭＰをとりにいく。
キーボード横に置かれたＣＯＭＰを手に取れば、
液晶にはひとつのデータが表示されていた。
【アナライズ報告：妖鳥　ハーピー】
名称とともに細かなデータも表示されていたが、いまの男に見る余裕はない。
リビングへ戻れば、うずくまり泣いている女性とそれをなだめる妖

精。

「なんなの、なんなのアレ！　さっきからいったいなにが起きてるの！」

『サクラちゃんもうさっきのはいないホー！　だから泣かないでホー！』

「……サクラ」

テーブルにＣＯＭＰを置いた男は、優しく女性を抱きしめる。

震える女性の身体を抱く、男の手もまた震えていた。

異常な事態に怯え泣きたいのは女性だけではななかった。

そうとわかり女性は男を抱きしめ返して、むせび泣く。

悲劇は、まだ始まったばかりなのを、二人は知る由もなかった。

第四話　力無き者は死を、力有る者は選択を

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああああああ」
「くるなあ！　くるな、くるな、くっるなあああああああああああああああああ！」
「ギギギギシシッシゲゲゲリリリリシイイイイイイギイギギギギギギイイイイイイ」
突如、玄関方面から響く悲鳴、続く怒号、人のものとは思えない絶叫。
リビングで抱き合っていたイタリア人の男とロシア人の女性は、恐怖にこわばった顔を玄関へと向ける。
震えが、互いに止まらない。
「ね、え。なに、なになに、なんなの！？」
止まらない涙を流しながら、手に力を強く込めて男の背を握る。
ふわふわと浮かんでいた妖精は、静かに男と女性のそばへと近寄り、告げる。
『サマナー……やばいホ。このあたり悪魔の気配だらけホ』
聞こえた言葉に、男は視界が眩み、気が遠のきそうになる。
しかし、背を握る手の感触がそれを許さない。
思わず顔を手で覆い、少しでも気を紛らわそうと男は頭を振った。
「……サクラ、おまえはグーフォとここにいろ」

「え？」

涙と鼻水で汚れた顔を、呆気に取られた表情で女性は男を見る。
男は顔を覆っていた手をどけ、その下から歯を堅く噛んだ表情を露にした。
そのままゆっくりと立ち上がり、強く掴んでいた女性の手を優しく外す。

「グーフォ」
『な、なんだホ？』
「頼む、ここでサクラを守っててくれ」
『サマナーはどうするんだホ』
「俺は……外をーー」
「やめてっ！！！」

言い終わらぬ内に女性が叫んだ。
立ち上がった男の腰に抱きつき、懇願（こんがん）するように顔を足にすりつける。

「さっきの、さっきの見たでしょ！？　あんなのが、いっぱい、いっぱい……」

最後は言葉にならず嗚咽だけが女性の口から声が出る。
苦しい顔を崩さないまま、男はしゃがみこみ言う。

「少しだけ見て、戻ってくる。心配するな」

つとめて気を張り、明るく声を出そうとするが、男の声は震えを隠せていない。
言ったあとで、自らの震えを止めようと奥歯を噛み締め、男は立ち

上がり玄関そばへ。
そして開いたままとなっていた金属ケースのなかから、銀色の銃を手に取る。
銀色の銃は見た目以上の重さ。
その重さに僅(わず)かな戸惑いを得ながら、慣れない手つきで銃のマガジンを抜き取り、
弾薬がつめられていることを眼で確認。
次にケース内の他のマガジンを手にとり、ズボンのポケットへ入れる。
最後に安全装置を解除して、
（映画の見よう見まねでしかないが）
内心に苦い想いを抱きつつ、銀色の銃を構えながら玄関の扉へと近づき、ゆっくりと扉を開いた。

●　●　●

最初に視えたのは赤、最初に嗅(か)いだのは鉄、最初に感じたのはーー
「！？」
男は肌を突き刺すなにかに反応して、右にある暗闇へ咄嗟(とっさ)に銃口を向けた。
いる、なにかがいる。
マンションの廊下、照明が点いたり消えたりするなか、壊れたまま

の照明のした、
そこに出来上がっている暗闇に、なにかがいるのを男は感じた。
「だれだっ！　だれだそこにいるのは！？」
視界に入ってくる赤と、鼻の奥へと漂ってくる臭いを無視して男は叫ぶ。
暗闇を一歩、一歩、ゆっくりと歩いてくる音。
水たまりを踏むような音とともに足音は男へと迫る。
震える銃口を向けたまま、男は一歩さがり、踵がなにかにぶつかった。
目の前の暗闇から顔をそむけないようにしながら、視線だけを足下へーー
「ひっ……！」
見知った男性、男にとっては近所に住む家族の亭主（ていしゅ）、
その男性の笑顔が、
血まみれのまま床に張り付いていた。
「うわあああああ！！」
情けのない悲鳴とともに、心が、一気に恐怖一色と化す。
心臓の鼓動が急激に早まり、汗が吹き出し始める。
歯ががちがちと鳴り、眼の焦点が定まらない。
思考が、現実を、認めない。

「……あぁ、あぁあ」

声にならない声が口から漏れ、暗闇の方へと後ずさろうとして、ビープ音が鳴った。

【警告　警告　半径５ｍ内に　敵性悪魔の接近を　検知しました】

けたたましいビープ音は男の後ろポケットから。

瞬間、恐怖から脱した男は後ろのポケットからＣＯＭＰを取り出し、暗闇を見た。

天井の照明が、点く。

【アナライズ報告：幽鬼（ゆうき）　ガキ】

ＣＯＭＰの表示と、目の前にあった暗闇が晴れたのは同時。

男の眼に映ったのは、突き出した腹に不釣り合いな細さの手足、飛び出た目玉、

灰色じみた肌の色と髪、最後に口元からは血のたれた人間の腕があった。

『オイィィシィィィォォオイシィィィヨォォォォォ』

幽鬼の顎が動くたび、涎とともに血が廊下の床へ垂れていく。

血が垂れる、血が垂れる、血が垂れる。

垂れる音とともに下品に口内の物を租借（そしゃく）する音が廊下へ広がっていく。

男は異形の口から無造作に出ている腕、揺れている手の平から眼がはなせない。

（あれは誰の腕だ？　あれは誰の手だ？　誰だ、誰なんだ？）

意味のない思考の連続。
自覚できないほどに頭が混乱しているのを男は理解できない。
眼に映るものは異常、鼻に臭うものは異常、肌に感じるものも異常、男の身を包むもの、ありとあらゆるものが異常、ゆえに男の思考もまた異常と化す。

（腕がある、誰かの腕だ、取り返してやらないと）

焦点の定まらない眼。
それでも両手で構えた銀色の銃は、銃口を幽鬼へと合わす。
ぶつぶつと男はつぶやく。

「……かえせ、うでをかえせ、かえせかえせかえせえええええええええ！」

引き金が、引かれた。

男の耳に届いたのは、映画で聞く破裂音など比にならない爆発音。
不安定な体勢に、狙いが定まっていない状況で撃たれた弾丸は、幽鬼の脇をかすめたのみ。
撃った本人は爆発音への怯みと、手元への想像だにしない反動により、構えた銃ごと後ろへ倒れ込む。

頭が廊下の床にぶつかる。

「づっ！」

痛みでのたうち回ったところで、眼を開くと、床の顔と眼があった。

「！！」

痛みと眼前の顔を見て、男は正気に戻る。

立ち上がろうとして床に手をつき、ぬめりとした感触に動きが止まった。

血だ。

胃のなかにあったものが、一瞬で喉へと迫る。

吐き出しそうになるのをこらえようとして、ビープ音。

【警告　警告　半径１m内に　敵性悪魔の接近を　検知しました】

さっきより近い、そう思った瞬間に男は嘔吐物が口から漏れるのもかまわず、

銀色の銃を両手でかまえて振り返った。

そこにあったのは大きな、大きな口を開いた幽鬼（ゆうき）。

不揃いにならぶ黄ばんだ大小の牙、垂れる血と涎。

口の両隣には大きく振りかぶられ指先が異様に尖（とが）った両手。

嗅いだことのない腐臭と汚臭が混じった臭い。

男の顔はひきつり、眼は最大まで広げられ、頭を小刻みに震わせながら、

幽鬼の顔面へと引き金を連続で引いた。

「うわあああああああああああああああああああああああああああ

あああ」

あらん限りの声とともに。

●　●　●

連続する発砲音を、ロシア人の女性は両手でさえぎっていた。
なにもかもを拒絶するように、両耳に両手を押し当て、リビングのソファーに伏せている。
空中に浮かぶ妖精はどうしたものかと困った表情で、女性と玄関を交互に見ては悩む。

連続していた発砲音が止んで数秒後。

重い、重い音とともに玄関の扉が開かれる。
悩んでいた表情から一変、妖精は険しい顔で扉を睨む。
そのまま女性を守るように、ソファーの手前へと移動。

『来るなら来てみやがれホ！　サクラちゃんには触れさせないホ！
……ってあれサマナー？』

意気込む妖精の前に現れたのは、腰が抜けた姿で床をはう男。
荒い呼吸とともに床をはいずる音、それを聞いて女性は顔をあげ立ち上がった。

「ジェ、ジェリオォ！」

男へ駆け寄ろうとして気づく、開いた扉から漂ってくる異臭に。

「な、なにこの臭いは！？」

『サクラちゃん、行っちゃだめだホ！』
妖精が止めようとするまえに、女性の腕を男が掴む。
「サクラ……にげる、にげるぞ」
「え、なに言ってるの、こんな、こんなに血が出てるじゃない！」
「これは、俺の血じゃない。……ぐっ」
真っ赤によごれた男の衣服を見て女性は涙を流す。
涙を流す女性を安心させようと、男は無理矢理に笑ってみせ、床に座り直す。
心配顔で妖精が尋ねる。
『サマナーさっきの音はどうしたホ？』
「ああ、悪魔に襲われた」
幾らか呼吸が整い、落ち着いた声で男は答える。
「だから言ったじゃない！　外にもいるかもしれないって！」
「サクラの言う通りだった……はは、死にそうなった」
「！　ばか！　ばかばかばかぁ！」
「痛いからやめろって……」
『まったく無茶するサマナーだホ。それよりもこれからどうするホ？』
呆れた口調の妖精に言われ、男は思案してから口を開く。
「まずここから逃げ出す」
だから、との言葉とともにゆっくりと立ち上がり、

「サクラ、グーフォ。逃げるぞ」

●　●　●

数分後、いくつかの着替えを押し込んだボストンバッグを肩から下げる男に、
キャリーケースを背後に転がしながら女性はマンションの廊下を歩いていた。
妖精は女性の背後をふよふよと飛びながら、時折ふりむいては気を配る。

男は銀色の銃を両手でかまえながら、慎重に歩みを進めていく。
後をついていく女性はハンカチで口元を押さえ、わずかに嗚咽音を出す。

「……グーフォ、気配はないな？」
『こっちにはないホーＣＯＭＰが鳴らないなら安全だホー』
「わかった。サクラ……きついか？」

眼だけを背後へ振り向かせると、女性はハンカチを押さえながら否定の意味で頭を振る。
頷きだけを返すと男は正面を向いて歩みを進めていく。
二人の足音だけが響いていくマンションの廊下、他の音はなにひとつない。

不気味にかすれる照明がいくつもあるなか、血と異臭は止むことはない。
二人が歩く足下にはいくつもの肉塊（にくかい）がころがっており、
ときたま開いている部屋の扉からは真っ赤となった壁や、身体の一

部が見えるだけ。
生きている人間の気配が、どこにも感じられなかった。
（もう誰も、生きていないのか……？）
この惨劇（さんげき）がマンションのなかだけであってくれ、そう思いながら男はエレベーター前につく。
いちど振り返り女性と妖精がいるのを確認。
エレベーター前のボタンを押すと、地下フロアを示すＢ１Ｆのマークに光がともる。
そこからＢ１Ｆ、１Ｆ、２Ｆとエレベーターが上がってくるのを、周囲を警戒しながら待つ。
機械が作動する音、ゆっくりと下のフロアからエレベーターの上がる音が聞こえる。
やがて音は近くなり、到着を知らせる軽快な音ともに止まった。
「よし、エレベーターに乗るぞーー」
「ま、まって！」
女性に腕を引いて止められる。
「どうしたサクラ？」
「あ、あれ」
震える指先が示すのは、いま開かれようとしてるエレベーターの中。
長い黒髪を俯（うつむ）き加減に垂らした女の姿があった。
「！　生きてる人がいたのか！？」

開いた扉から跳び込み、男は顔を見せない女へ声をかけようとして、気づいた。
妖精が男より素早く前へと飛び出たのを。

「おい、グーフォ……」
『サマナー……こいつは悪魔だホ』

両手をかまえ、妖精は周囲に白い霜を発生させていく。
男がわけがわからないまま、止めようとして目の前の女が面を上げた。

「！」
『ブフーラッ！』

妖精はひときわ大きな氷塊を生み出し、女へとぶつける。
避けることもせず黒髪の女は氷塊を食らって、エレベーターの壁に突き刺さり、

『イタイタイタイタイタイタイタイタイタイタイタイタイ』

奇怪な叫びをあげながら手足を奇妙なまでに震わせる、腹部を氷塊に貫かれたまま。
目の前の異様な様子に男はたじろぎながら、銃をかまえ女の顔面へ発砲。
三発撃ったところで女の叫びは止み、身体の動きも止まる。
動きを止めた女の顔は、ゾンビのように肉がただれていた。
背中に抱きつく、女性のぬくもりを感じながら、男は呼吸を整え言う。

「なんで、いまのは、ＣＯＭＰが反応しなかった、んだ？」
『んーたぶんだけどホー』
妖精もよく分からないといった様子で答える。
『さっきの、人間から悪魔に成り立てだったから、じゃないかホー』
「人間から、悪魔に……成り立て……？」
言われた言葉が理解できず、男と女性は立ちすくむ。
『それよりもどうするホ？　もうエレベーターは使えないと思うホ』
「つっ……しょうがない、階段で駐車場まで行く」
「うぅ……」
冷えたエレベーターを背後に、二人と妖精は階段を降り始めた。

●　●　●

薄暗い照明が点いている地下フロアの駐車場。
何台も車がならんでいる一角にて、ライトが点く車があった。
オリーブグリーンの車体カラーをしたＢＭＷのＭＩＮＩＣＯＯＰＥＲ。
運転席にはイタリア人の男、助手席には妖精を抱きかかえるロシア人の女性。
「ねえ……ジェリオ、どこに、どこへ逃げるの……？」
「……」

妖精の後頭部に顔をうずめながら、女性は男に問う。
両手をハンドルに置き、手の甲に額を当てながら男は黙りこんでいる。
重なり続ける異常事態に、まともな考えなど浮かんではこない。

（どこへ逃げればいい。どこへ逃げても一緒じゃないか？）

脳内には疑心暗鬼（ぎしんあんき）が巡り、胸の内には濁（にご）った感情だけがうずまく。

（マンションだけ、の状況だとは考えれない）

ますます黒い方向へと落ちていく感情を抱きながら、思考は最悪を予想。
ハンドルに置いた手が、強く、強くハンドルを握る。

（ここから逃げても、外は……外は……！）

感情とともに思考までもどす黒くなっていこうとして、弱々しい声で名前を呼ばれた。
思わず眼を見開き、左を向く。
目元を赤く腫（は）らしながらも、涙を流しつづける女性の姿。

「サクラ……つっ、大丈夫、大丈夫だ」

気休め、そうと分かっていても言葉をかける。
女性は頷き、妖精を抱きしめるのを見ながら男は、
ふと思いついて妖精に尋ねた。

「グーフォ、こうなったときどうしたらいいか、Ｓｔｅｖｅｎの奴に聞いていないか？」

『……アイツはこう言ってたホーサマナーたちを死なせるなって』
「それ以外は？」
無言、それが答え。
「くそっ！」
悪態とともにハンドルを叩く。
焦げ茶色の髪をかきむしり、男は考える。
外の状況も最悪かもしれない、だが動かなければいつかは、食われる。
奥歯を噛(か)み締めて、男はアクセルを踏み込んだ。

●　●　●

地下駐車場から出て男は気づいた。
空が、紅(あか)いと。
ハッとして腕時計を見るが、そこには午前一時過ぎを示す数字。
真夜中ならば当然空は真っ黒のはず、しかし眼に見えているのは違った。
怯えた表情となった女性に抱きしめられた妖精は、冷静な声で言う。
『あれは異界(いかい)の壁だホ』
「異界……？　いま異界って言ったのか？」
『言ったホ』
「は、はは、おい、じゃあなんだ。京都はいま、異界化してる、なんて言うのか？」

異界、その言葉に男は聞き覚えがあった。
フリーゲーム、シン・メガミテンセイのなかで。
悪魔、もしくは魔に魅入(みい)られた人間が力や儀式を用いて、変質させられた空間。

「どこまで、どこまで！　あのゲームはなんなんだ！」

ゲームを思い出しながらもアクセルを普段よりも踏み込み、スピードを上げていく。
変質させられた空間は作中において、異界と呼ばれ、空間が変じるのを異界化と呼称されていた。
大通りにでたところで叫び。

「ジェリオ！　前！」
「なっ！」

空を飛び交う無数の影、道路には爆発炎上している車、地上を徘徊(はいかい)する異形の数々。
ゆらめく炎と普段どおりに光る街灯に照らされて、不気味な姿がいくつも眼に入った。
人間ではない、悪魔だ。

ビープ音。

【警告　警告　半径１００ｍ内に　敵性悪魔の反応を　１００体以上　検知(けんち)しました】

歯ぎしりをたてて歯を噛み、男はアクセルを踏んだ。
メーターは一気にあがって速度は１００キロを突破。

もはや人気のない悪魔だらけの歩道を選び、車は走りだした。
「いやあああああああああああああああああああああああああああ」
助手席からは全てを拒絶する悲鳴。
車の前方に立つ影などおかまいなしに車は広い歩道を突き進んでいく。
なにかにぶちあたり、そのたびに金属の歪む音。
それでも男はアクセルを緩めはしない。
「どけえええええ、どけえええええええええええええええええええええ」

●　●　●

どれだけの時間が過ぎ、どれだけの距離を走ったのか、どれだけの悪魔かナニカを轢いたのか。
いつのまにかパンクしたのか、定期的に車体が沈み、持ち上がり、また沈む。
ホイールが地面を削る音をたてながら車のスピードを下げていく。
速度を示すメーターは０と１０の間を行き来しているのみ。
やがて、かつてオリーブグリーンであった車体は、ゆっくりと路肩へ停止した。
運転席側にある扉がゆっくりと開く。
焦げ茶色の髪をした男。
ふらつく身体を運転席から抜き出し、車体にもたれながら地面に立

つ。

「ここは……ここはどの辺りだ……？」

疲れと緊張、両方が濃く現れた顔で男は道路の上、青い表示板を見る。

そこには堀川玄以（ほりかわげんい）と書かれていた。

文字を読み、男は自身の現在位置を知る。

「北山を、越えていたのか」

自分達が住んでいたのは府内でもっとも大きな駅、京都駅。

そこから南に下った堀川十条あたり。

「そうか。堀川をずっと北に走っていたんだな」

いまさらながら考え無しに走っていたことに、自然と笑いがでてきた。

笑おうとして気づく。

「！　サクラ！　サクラ大丈夫か！？」

慌てて車内をのぞきこみ、助手席を見る。

そこには気絶しているのかぐったりと席にもたれかかる白髪の女性と、

眼を回した様子でいる妖精の姿。

一瞬呆気にとられながらも苦笑。

「おい、おい起きろグーフォ」

『う～～～ん、眼が、眼がまわるホ～』

「悪魔のくせにスピードに酔うのか」

呆れた声を出しつつ、車内から出て周囲を見る。

相変わらず人気はない。

だが、不思議と危険もないように男は感じられた。

眉間に皺(しわ)をよせ、ジャケットの内側に入れておいたＣＯＭＰを取り出す。

途端アイコンが表示され、そのうちのひとつを指でタップ。

【Ｓｅａｒｃｈ中…Ｓｅａｒｃｈ中…Ｓｅａｒｃｈ中…完了】

表示が切り替わる。

【周囲に　敵性悪魔の　反応はありません】

安心の吐息が漏れた、だが。

【注意　注意　接近してくる悪魔の　反応あり】

次の表示を見て、息を詰める。

素早く運転席に置いてあった銀色の銃を手にとり、人気のない通りへ銃口を向けた。

「起きろグーフォ！　悪魔がいる！」

『ヒ、ヒ～ホ～』

まだ眼を回しているのか、左右にまわりながら妖精が男のそばへやってくる。

瞬間、耳に聞こえたのは、足音。

聞こえて来たのは北の方角、建物と建物の間である路地から聞こえて来た。
男は油断なく銃をかまえ、妖精も回していた眼をしっかりさせる。
足音が、止まる。
姿は建物の影に隠れたままで見えない。
数秒、お互い動かない時間が流れた。
沈黙に耐えられず、男は口を開く。
「おい！　そこにいる悪魔。でてこい！」
『そうだホー！　でてこなかったら凍らせちゃうホー！』
『……ずいぶんと奇妙な人間と悪魔がいたものだ』
建物の影から現れたのは、古い時代の甲冑（かっちゅう）と槍を持った人物。
その姿に男は戸惑う。
「え、人じゃない、のか？」
『少なくとも今の時代では人ではないな、先ほどお主が申したように悪魔である』
男はＣＯＭＰを取り出し、槍を持った人物に向けてアナライズのアイコンをタップ。
【アナライズ報告：妖鬼（ようき）　モムノフ】
「モムノフ……？」
『左様（さよう）、かつては名のある武士であったが、いまはご覧の有様（ありさま）よ』
「そんなのが、どうしてここにいるんだ」
『ふむ……なんと言葉にするべきか、気づけばいたのよ。ここに』

『サマナーサマナーちょっといいホ？』

肩をつつく妖精に視線だけを男は向ける。

「……なんだ？」

『アイツ、たぶんどうしていいか戸惑ってるホ』

「それが？」

『交渉（こうしょう）、してみたらどうホー？』

「交渉……？　ああ、そういうことか」

言われて思い出す、ゲームのことを。

登場する悪魔と交渉し、条件を出し合い、ときに物品や金銭のやりとり、そして仲間としたことを。

（まさか本当にやることになるとはな）

「おい、ちょっといいか」

『ふむ、なんだ？』

「お前はどうして俺たちに近づいたんだ？」

『たまたま、見かけ興味を抱いたのだ』

「興味？」

『左様、拙者ら悪魔を使役（しえき）するものは陰陽師（おんみょうじ）かそれに連なる者のみ』

武士はひとつの動きを見せる。

片手に持った槍で男が持つＣＯＭＰを指し示す。

『しかしながら、おぬしからは陰陽と思わしき力は感じられぬ。

その代わりに妙な物を使い、悪魔を従えている……一体どういうことかと思うてな』

槍が元の位置へと戻る。
男は手に持つＣＯＭＰを一度見て、それから視線を武士に向け直す。
「正直、俺にもよくわからん。この機械でこいつを召喚したことぐらいしか」
『こいつ呼ばわりされたくないホーちゃんとグーフォと呼べホー』
『はっはっは！　なんと妖精、お主は契約で仲間となったわけではあらぬのか』
不意に笑い出した武士は、背後へ振り返り言った。
『おいそこな妖魔（ようま）よ！　やはりこの人間、興（きょう）がそそられるぞ！』
「！？」
武士が声を出した方、路地からもうひとつの姿が現れた。
青白い肌を露出させながら、宙にうかばせた翠（みどり）の衣をまとう裸足の女が歩いてくる。
「な、もう一体いたのか！？」
『妖魔などと呼ぶでない、時代遅れの武士よ』
気の強い口調で裸足の女は言い、武士の隣へならぶ。
男がＣＯＭＰのだすアナライズ結果をちらりと見ればそこには【妖魔　アプサラス】とあった。
『すまんの、拙者（せっしゃ）とこやつでどうしたものかと話していたところなのだ』
『ふん、人間に頼る謂（いわ）れなどないがな』
「二体同時に交渉なんてなかったぞ……」

ゲームにおける交渉は基本一体の悪魔に対して行われるもの。
しかし、現実もその通りにいくなど有る訳が無い。

『なに、なにもお主らをとって食おうなどという腹ではない』
『……人間よ、選ぶがいい。我らと契約するか、即刻立ち去るか』

穏和な言葉を放つ武士とは対照的に、妖魔は高圧的に言葉を放つ。

「なに？　どういうつもりだ？」
『……非常に腹立たしいことだが、いまの我らは自らを保(たも)つのにマグネタイトが必要だ』
『左様、通常ならば異界において保持のためにマグネタイトはいらぬ』
『どういうことかは不明だが、この異界ではマグネタイトが吸い取られるのだ』
『そのためにも悪魔を使役する陰陽師との契約を望んでいたのだが』

そこで武士は言葉を切って、男を見る。

『そこへお主が現れたのだ。妙な機械にて悪魔とともにある異邦人よ』
「そういう、ことだったのか」

心のなかで合点がいく、だが男は用心深く言葉を飛ばす。

「契約することはかまわない。だが条件がある」
『ほう人間のくせに言うものだ。聞いてやろう』
「ひとつは契約する以上は俺の言うことを聞くこと」

武士は頷き、妖魔はしぶしぶ頷く。

その動きを確認して男は言葉を続ける。

「もうひとつは……いざというときはサクラを連れて逃げてくれ」

男はそう言って、いまだ車の助手席にて気絶している女性を指さした。

武士と妖魔は一瞬ほうけた表情となり、その後武士は声をたてて笑いだす。

『ぬわっはっはっは！　いいぞ！　興がのった！　拙者は契約するぞ主よ！』

『なにを勝手に決めている。だがまあ、いいだろう我も契約しようぞ』

呆れ顔となっていた妖魔だが、言葉の最後には柔らかな笑みを見せていた。

二体の言葉に、男はようやく安堵の表情を浮かべる。

「ああ、頼む。俺の名はジェリオだ」

『オイラはジャックフロストのグーフォだホー！』

『拙者はモムノフと申す』

『我はアプサラスだ』

そして二体は声を揃えて言った。

『『今後ともよろしく』』

第五話　混沌の舞台に役者は集う

そこは薄暗がりにつつまれた和室。
畳が敷かれ、空間を仕切るふすまは流麗な松や梅、いまにも襲いかからんとする虎、飛び立つ鶴。
様々な絵が古き先人の手によって気高く描かれており、室内の雰囲気を厳(おごそ)かとしている。

和室が連なる空間の奥の奥、そのまた奥の秘(ひ)とされる奥。
手前よりも一段高く畳みが敷かれ、格の高い者が鎮座すべき場があった。
だが、いま鎮座するべき者はおらず、代わりにあったのは三つの神器(じんぎ)。

勾玉(まがたま)、鏡(かがみ)、剣(つるぎ)。

左右から挟むようにして火を灯した燭台が置かれ、室内を照らす。
ひとり、神器の置かれた前にて拝むようにして手を合わし、なにかを唱える者あり。
古い、時代のかかった羽織をまといて一心不乱に彼は唱えながら短く歩む。
長い黒髪を背にて束ね、火が照らす顔は眉目秀麗(びもくしゅうれい)。

低く、低く地へとどけんとする低い声。
声とともに短く地面を刻む足裏は、やがて北斗七星を示す流れと化す。
唱える声の後ろ、何重にも呻く音が周囲へと広がってもいた。
音の中心にあったものは、生首たち。

老若男女、様々な人物の生首、しかしそれらは生きていた。
目をうごかし、喉をひくつかせ、口から泡を吹き、それでもなおそこに在らんとした。
否、生首たちは生かされていた、すでに無き部分から血をしたたらせ、
畳にはじわじわと赤い赤黒い染みが広がっていく。

殺せえ、死なせてくれえ、もう嫌だあ。
途切れなく怨嗟を込めた呻き声が、一心不乱になにかを唱える彼へと向けられる。
不意に唱える声が止んだ。

切れ長な目がゆっくりと、ゆっくりと背後へ向かう。
あれだけあがっていた声もまた、向けられた目によって止まる。
まるで息の根を止められたごとく。

彼の手が伸び、掴んだのはいつつの生首。
髪の毛を引っ掴み、両の口端をつりあげ、笑う。

「喜べ！　喜べ！　喜べ！　慢心しきり驕り溺(おぼ)れた者どもよ！」

空いた手に神器である剣を掴み、剣先を生首たちに掲げる。

「もはや安倍の一族が栄誉を掴むことは無く、これからは我が一族が栄誉を得る！」

天に向かって彼は大笑い。

「憎き怨敵(おんてき)である晴明よ！　貴様亡き時代は、芦屋道満(あしやどうまん)なる子孫によって葬られるのだ！」

大きく最大限につり上げた口のまま、彼は生首に剣を刺していく。
「破(やぶ)れ都を追われた我らが先祖道満よ！」
次々と、目から、口から、脳天から生首に剣を刺す。
「一族積年の怨み、今宵にて道満が祖、芦屋御津(あしやみつ)が晴らそうぞ！」
天へと掲げられた剣にはいつつの生首が連なり、怨嗟の声を呻く。
「開け開け開け異界なる門よ！　血と肉と力を贄に悪しき世ではなく！」
剣に連なった生首たちが燃える。
「我らが一族の栄えある正しき世を、我が前に示せぇ！」

●　●　●

「モノムフは前を！　俺が銃、グーフォとアプサラスは魔法だ！」
焦げ茶色のくせ毛をした男は、銀色の銃をかまえて叫んだ。
自身の背後に白に近い金髪をもった女性を控えながら。
彼らの目前から迫ってくるのは数体の悪魔。
地上には動きの鈍いゾンビの群れ、空中からは目をぎょろつかせた翼ある悪魔たち。
『悪くはない指示だのう！　薙ぎ払いじゃあ！』

気合いの掛け声ともに槍がふるわれ、道路のゾンビたちが吹っ飛ぶ。
だが、空中からは幾つもの影が武士へと迫る。
そこへ飛んで行くのは、

『馬鹿者！　前へ出過ぎだ！　ラクカジャ！』

怒声とともにうすい靄(もや)が武士の身を包み、小悪魔たちの攻撃を軽減。
思わぬ堅さに怯んだところで銃口と氷の礫(つぶて)が狙いを定めた。

『いっくホー！　マハブフッ！』

妖精の発声とともに銃撃音が重なり、空中を飛び交う影を落としていく。
度重なる攻撃にさらされて、目前の悪魔たちは退こうとするが、

『このまま逃がすと思うかッ！』

自らに攻撃力上昇の魔法、タルカジャを掛けた武士の槍突きによって、
逃げ惑っていたゾンビや地上へ落ちた翼ある悪魔らが狩られる。
同様に男も武士がまだ手をくだしていない悪魔へ発砲していく。

「このままモノムフと俺であとは始末する。グーフォとアプサラスはサクラといてくれ」

返り血を拭いながら、男はマガジンを取り出して交換。
武士を追いかけるようにして、駆けていった。

「ジェ、ジェリオ……」
『だめだな、あの男は。女心というものが分かってないようだな』

『男の子はすーぐ目の前のことに夢中になっちゃうんだホー』

不安そうに声をだした女性とは裏腹に、怪魔と妖精は呆れた声を出す。

気が緩んだ、その一瞬を狙って甲高い声が走った。

「！？　サクラ！　上だ！」

甲高い声に気づいた男が見たのは、全体が朱であり鶏冠（とさか）は青、そして口元にサーベルをくわえた巨大な鳥であった。

左腕に固定されたＣＯＭＰを構え命令。

「ＣＯＭＰ！　アナライズ！」

【Ｓｅａｒｃｈ中…Ｓｅａｒｃｈ中…完了　アナライズ報告：妖鳥　マッハ】

【弱点：銃攻撃　衝撃】

表示結果に一瞬だけ目を通して男は叫ぶ。

「サクラァ！　そいつは銃が弱点だ、マシンガンで撃て！」

アプサラスとグーフォが女性を護るように前へ、

サクラは怯えた顔で肩から下げていたマシンガンを頭上へ向けた。

だがマシンガンを握る手はがちがちと震え、安定しない。

『サクラちゃん無理しなくていいホ！』

『こやつ程度、我らに任しておけ！』

そこへ妖鳥はいちど大きくはばたいて滞空。

クチバシにもったサーベルを器用に足へともちかえ、口を開いて不協和音を放った。
物理攻撃がくると構えていた妖精と妖魔は、虚をつかれパニックボイスを食らう。
背後で震えていたサクラも餌食となる。

『ぬぐぅ！』
『あぎゃぎゃぎゃホー！』
「！　い、いやあああああああああ！」

範囲外であったジェリオは、その場で銃をかまえ発砲。
数発打ち込むものの、全てがかわされてしまい、マガジンが空となる。
悪態とともにマガジンを投げ捨て、交換して駆け出す。
眼下で耳をおさえてのたうつ三人を見ながらマッハは愉悦の鳴き声をあげ、
ふたたびサーベルをクチバシに構えながら急降下を始めた。
怪鳥が急降下するのを睨みながら男はアスファルトの地面を駆け、
ジャケットの懐から青い石をとりだして空中へ投げる。

「はじけろっザン！」

叫び声とともに放られた石ははじけ、石の中心から衝撃が発生した。
狙い違わず石から発した衝撃は怪鳥の大きい身体へとぶつかり、悲鳴をあげさせる。
体勢が崩れたところに銃弾がとび、片方の翼に穴があく。
怒りの声をあげて、赤い鳥はジェリオへと向きを変え、強くはばた

いて接近。
とっさに銃口を合わせてようとして放たれたのはバインドボイス。

「くわっ！」

突如、男の身体が堅くなり、動きがままならなくなった。
意識のなかだけで理解したのは身体をしびれが襲ったことだけ。
手元からは銃がずりおちてしまい、震える身体を眼前の相手に晒してしまう。

鈍く光るサーベルが首もとを狙ってくる。
このままでは首をかっ切られる、それだけは嫌だと思って男は身をよじり、
身体をむりやり左側へと倒す。
しかし、完全にはまにあわず右肩へ走る火傷のような痛み。

「……！」

咄嗟に食いしばり、左腕だけで落ちた銃を拾い、連射。
狙いなく撃たれた弾は当たらず、二撃目を許すこととなった。
今度は脚へと切られた痛みが走る。

「ジェリオォォ！！」

痛みでもうろうとする男の視界の先で、女性がマシンガンを乱射。
それすらも容易くかわされてしまい、勝ちを確信した鳴き声を妖鳥があげる。
が、鳴き声は一筋の突きによって断たれた。
マッハの背後へ跳躍したモノムフによって、

赤い鳥のクチバシから槍が突きだされていたのだった。

●　●　●

右肩と右足のふくらはぎ、二カ所に負った傷が妖魔の魔法によって癒されていく。
女性に膝枕をしてもらっている男は、傷の痛みに顔を歪めながら言う。

「……すまん、アプラサス」
『これぐらい礼にはおよばん。しかし、ひどいものだな』

手当を終えて周囲を見回しながら妖魔は腕を組む。
ＭＩＮＩＣＯＯＰＥＲを捨てて移動をしてから悪魔たちと出会った回数は既に二桁。

『確かに。いくら異界といえど、こうも殺気だらけなのもおかしいと言うもの』
『あーもーオイラ魔力が尽きちまうホーガス欠になるホー』

地上から空中からと問答無用で悪魔たちはジェリオたちに襲いかかり、
先ほどの赤い妖鳥との戦闘を終えて、一行はようやく建物の影に身を潜めていた。
冷たいアスファルトをズボン越しに感じながらサクラは頭上を見上げ言う。

「なんとか橋を渡れたけれど……ジェリオ、このまま北上するの？」
「道なりに来ただけだからな。ひとまず安全な場所がないか探す」
『異界のなかで安全な場所なんてあると思えないホー』

「……それでも、だ」

悪魔、だからこそ分かりえていることを妖精は言う。
そのことに苦みを得ながらも男は意思を固め、
傷の痛みがなくなったのを確認しながら立ち上がる。

「この先、たしか上賀茂神社があったはず。
そこは人気もないだろうし、なにより身を隠すなら山のほうが安全なはずだ」
『うむ、主の言うことはもっともであるが』
「が？」

武士は肯定に疑問色。

『神社、となればそこに奉られた神がおられるはず。
なればこの異界化に乗じて神が顕現されていることも有り得るかもしれぬ』
『……こやつの言葉はあくまで可能性にしか過ぎぬ。が注意は必要だ、人間。』

妖魔も言葉に頷きを続け、男に言葉を送る。
男はマガジンを入れ替えて、懐の石を数えて皆を見た。

「わかった……注意も警戒も必要だが、それでも行く。いいな？」

全員が、ジェリオの声に応えた。

●　●　●

「ヤタガラス、アギダイン！　オンコットはファイアブレス！」

鋭く飛ばされた指示に従い、二体の悪魔は空中と地上から炎を放つ。
場所は山奥にある古めかしい洋風の屋敷にある、広い庭。
庭を埋めるのは人、ではなく悪魔の群れ。

「ちぃ、面倒な数だ」

短く文句をたれた人物は、札を放って悪魔を痺れさせ、ときに惑わせる。
動きが鈍ったところを朱の体躯(たいく)をもつ猿が剣で屠(ほふ)っていき、
空を飛び交う三本足の鴉が燃やし、浄化していく。

「殺気を辿ってきてみたら、ご丁寧なこった」

二体の悪魔を使役しながら、ダウンジャケットを着た短髪の男は思う。
安倍晴明神社に残った殺気を追えば、たどり着いたのは岩倉の人里離れた屋敷だった。
屋敷の表札に書かれた名前は、芦谷。

「芦屋を名乗ることを戒められた一族が生きてたとはな」

群がる悪魔を蹴散らしながら、一人と二体は屋敷へ進む。
短髪の男が記憶に描くのは、かつて父親と呼んだ人間から教えられた安倍家の過去。

安倍晴明と芦屋道満亡きあとも、勢力争いを繰り広げた芦屋道満の子孫たちは、
長い争いの果てに晴明の子孫たちに敗れ、その名を名乗ることを封じらた。

同時に権力も栄誉も取り上げられ、残ったのはただ生きる権利のみ。

「……復讐、ってわけか」

屋敷の扉前へ男は立つ。

背後を鴉が守り、前には猿が立って、扉を剣で断った。

断たれた扉が崩れ落ち、中からはほこりにまみれた空気が外へ流れる。

眉をひそめ、男はうかがうようにして屋敷内部を見ようして、

『伏せよ！』

叫んだ猿の声によって男はしゃがむ。

伏せた上空を飛んでいくのは呪殺の魔法。

幾重にも連なった闇をまとう骸骨頭が通りすぎていく。

舌打ちとともに新たな札を取り出し、暗い屋敷内へと札を放つ。

強烈な光が札から発せられ、屋敷内に潜む影をあらわにした。

「！　邪龍（じゃりゅう）を飼ってるとはいい身分じゃねえか！」

言葉の先、現れたのは全身に紅い血管をうかばせた白い邪龍。

邪龍には翼はなく、百足のように手が細長い体躯の左右にびっしりある。

そして目はなく、むき出しの歯が大きな口にそびえていた。

がちがちと歯を鳴らして邪龍は、頭をもたげて獲物を見定める。

『ニーズホッグが相手とはのう。長生きしてみるもんじゃて』

「軽口叩いてる暇はねえぞ」

『主よ、呪殺だけはとくと警戒を』
「わかってる、ヤタガラスおまえは引っ込んでろ」
ジャケット内から取り出した管に鴉は白い光となって吸い込まれる。
代わりに取り出した管から現れたのは、蒼き身体を持つ龍。
「龍にはこっちも龍でいくか。いくぞ青龍！」
『久方ブリノ戦イダ。我ガ四神ノ力（ちから）ゾンブンニミセヨウゾ！』
天へと吼えた蒼き龍神は息を吸い込み、氷の嵐を邪龍へと吹き付ける。
人間大の大きな氷塊と風がニーズホッグを襲うものの、効果は薄い。
風に乗るようにして朱の猿も斬りつけるが、白き鱗に剣は弾かれるばかり。
うるさい虫を払うように邪龍は白い身体を暴れさせ、近くにいた男と猿を狙う。
『主よ！　こやつ剣が通らぬ！』
「ちぃ、反射しないだけマシか。　なら炎を浴びせてやれ！　青龍は放電だ！」
男とともに飛び退くと同時に猿は口から炎の息を吹き出し、
ぐるりと円を描くように邪龍の上に舞った龍神は身体から電撃の雨を降らせた。
土埃をたたせながら電撃は邪龍へと降り注ぎ、白い体躯を焦がす。
だが、痛みに悶えるあまりニーズホッグの動きが激しくなる。
「！」
『させぬわ！』

男が反応できない速さで飛んでくる白い尾の一撃。
動けたのはそばにいた朱の猿だけ。
両手の剣で尾の一撃を止めようとするも剣は砕け、
止まらない尾の動きは猿だけでなく男も巻き込んで吹っ飛ばした。

「ぐわっ！」

吹き飛ばされながらも、尾の攻撃は猿によって緩和されたことで男は無事だった。
しかし立ち上がって気づく、猿が息をしていないことに。

「くそったれが。わりぃなオンコット、あとで蘇らせてやるからな」

取り出した管に猿は吸い込まれていく。
新たに取り出した管を見つめ、男は言う。

「ここまでの相手だとはな……」

龍神の電撃がほとばしり、邪龍の呪殺が飛び交うなかへ向けて、
男は新しい悪魔を喚び出す。

「でてこい、持国天！」
『持国天、ここに在り！』

声とともに現れ出たのは、翠の唐風（からふう）鎧装束を身にまとい剣を携えた鬼神。

「青龍は奴に放電を浴びせ続けろ！
　んでオレが一緒になって動きを止めたところを、持国天！　狙え

！」
『承知つかまった！』
放たれる呪殺と氷の魔法。
龍神が身をくねらせ避け、ダウンジャケットの男は札で防ぎ、避ける。
そして隙を狙って電撃の嵐が降り、合わせたようにして札が白い邪龍の動きを止めた。
「ぶちかませっ！」
瞼をふせ、後方に陣取りて、力をためていた鬼神。
走った一声に見開きて、動く。
『機成り！』
駆ける脚は、最速へ鬼神を運び、その身を空へと跳ばす。
雷に痺れ、札に止められた身体を邪龍はそれでも動かそうとするものの、
しかし、その動きもこれまでだった。
『滅せよ』
空からニーズホッグの頭部へと降り立った鬼神は、地面へ打ち込むようにして剣を突いた。
白き邪龍であったものは滅び、その姿を塵へと変じて散っていく。
青龍と鬼神を管へと送還した短髪の男は、再び鴉を呼び出す。
「周辺を警戒しとけ」

『御意』

もはや主(おも)だった悪魔の気配は無い。
遠慮なく洋風の屋敷へと男は踏み込んで行き、次々と部屋を見ていき、探索していく。
しばらくして見つかったのは、個人用とおもわしき狭い部屋。

床には堅くなった血で描かれてあった魔法陣。
男はしゃがみ込み、陣に書かれた内容を読む。

「……こりゃ西洋のと陰陽を組み合わせてやがるのか」

思わず内容の精巧さに唾を飲み込む。

「しかし、だ。悪魔を召喚する陣じゃない、じゃあなんだ？」

読み取れたのは悪魔召喚ではない、ことだけだった。
陰陽の理だけでは読み解けない内容に、男はただ悩むのみ。
小さく舌打ちをして周囲を見回す。
室内の棚にあったのは一枚の写真立て。

写真立てのなかに飾られていたのは、ひとつの家族。
男は無言で手にとって写真を見る。
見ている写真の下側には手書きの文章があった。

【芦谷御津　二十歳を記念して】

おそらく中央に立つ男性がそうだろう、と男は思う。
女性のように整った容姿を持つスーツを着た男性。
周囲には彼を祝福するかのように笑顔の親類。

「……ずいぶん、幸せそうじゃねえか」
唇を歪ませ、苛立たしそうに声が漏れる。
思い起こされたのは家を勘当されたこと、だが今は関係ないと男は頭を振り、言葉を口にした。
「なにがあったのかは知らねえ、なぜ安倍一族へ復讐するかも分からねえ。
だがな、勘当の身なれどオレは一族の長男だった男だ」
写真立てを床へと落とし、踏みつける。
「京を騒がし、悪事を働く奴は、同じ陰陽師であるオレが許さねえ」
そう、
「第四十二代目、安倍晴明の名においててめえを許さねえ」
短髪の男は、自らの名に誓った。

●　●　●

数時間後、ようやく見えて来た場所に、ジェリオたちは足が止まる。
「なんだ……？　まるで神社全体がぼんやり光ってるが」
「あ、見間違いじゃなかったんだ」
疑問を含んだ声に、サクラの声が続く。
彼らの前に見えている上賀茂神社、その全体が夜中には不似合いな

光に包まれていた。
隣に立つ武士と妖魔も見上げて言う。

『むう、これは結界かのう』
『おそらく間違いないだろうな。高位の存在が張ったと考えてな』
「……やっぱりなにかいるわけか」
『うえーもうオイラくたくただホ～』

警戒心を高める男のそばで、両手をだらりとさせる妖精。

「ありがとねグーフォ。すっごく頑張ってくれたしね。私の分まで」
『そんなことはないホ～でへへ』

褒め言葉に照れる妖精。
その様子に呆れる男だったが、普段の調子を見せ始めた女性の顔に笑みが漏れる。

「？　どうしたのジェリオ？」
「いいや、なんでもない」

ここに来るまでも何度か戦闘があった。
だが、すでに危なげなく闘い抜くことができ、今の自分達なら危険はないと男は判断していた。

が、背筋が、冷えた。

思わず神社方向へ銃口が向く。
同時に武士は槍を、妖魔は手の平を向けた。

「だれだっ！？」

強烈な圧迫感を越えて放たれる声。
いままでにない圧力を目の前から感じ、冷や汗が流れ出す。
ビープ音。
左腕に備え付けられていたＣＯＭＰは、ひとつの表示を出す。
【注意　注意　高位悪魔の存在を　感知しました】
「高位、悪魔だって……？」
『高位か、ふむ。悪魔というのは解せぬが、それも良かろう』
銃口を構えた先、神社入口となる朱の鳥居前に顕現したのは、
『御身が名は伊都之尾羽張（いつのおはばり）の子、建御雷（タケミカヅチ）神である』
雷光が白い衣装を着込んだ姿にまとわりついており、下げられた金色の剣からは気が迸（ほとばし）っている。
ほとばしる圧に、モノムフとアプサラスは後ずさり、ジェリオも足が下がった。
『そう構えずともよい、異邦人なる者どもよ。
己は雷との縁が深い故、ここ上賀茂へと顕現した身』
そう言いつつ、神は頭上を見上げた。
『しかして、顕現してみればなんと混迷しておることか。
己が力をもちいて、ここ、上賀茂を己が土地して治め、人を護っておる次第。
そこへ現れた異邦人よ、悪魔を使役する力をもってして何用か』

「人を、護っているのか？」
『そのとおりだ。神なる者が子である人を護らずしてどうとする』
雄弁に放たれる言葉。
「だったら、お願い助けてください！」
「おいサクラ！」
「お願い！　みんな、みんな殺されて！　誰も、誰も生きていなくて！」
男の背から飛んだ悲痛な女性の声に、男は自身の間違いを知る。
女性はただ気を張っていただけに過ぎなかったのだと。
涙を流して訴えかける女性を見て、神は言う。
『……白き髪を抱く異邦人よ。神である身ができるのは護るのみ、しかしだ。
身体を安め、心の安定を得るためだけであれば、この地にて休むがいい』
手元から金色の剣を消し、神は身を横にして鳥居への道を開き、姿を消した。
「助けて……助けてよぉ……」
「サクラ……すまなかった」
「うぅ……」
張りつめていた気が解けたのか、途端に泣き崩れていく女性。
男はただ言葉だけを口にして、女性を抱きとめる。
二人の様子をしばらく見たあと、武士は口を開く。

『主よ、先ほどの相手の言葉を信ずるならば、ここで幾分か安めよう』
『あれだけの存在ならば、言葉も信用なるだろうな』
「そう、みたいだな」
女性を腕の中で泣かせながら、男は二体の言葉に頷く。
「それに建御雷神の言葉が本当なら、ここには生きてる人がいる」
「えっ？」
サクラが顔をあげる。
「さっきアイツは人を護っていると言った。ならそういうことじゃないか？」
「良かった……生きてる人いたんだ……」
安心したのか、女性は顔から険が抜ける。
そこへ妖精がふわふわと力無くとんできた。
『だったらオイラたち、一度ＣＯＭＰに入るホー悪魔いたら騒がれるホ？』
「グーフォにしちゃ名案だな」
『……ほんとはさっさと休みたいんだホー』
「そういうことか……まあいい、モノムフにアプサラス、おまえらもＣＯＭＰで休んでてくれ」
『うむ』
『分かった』
男は左腕のＣＯＭＰを操作して、武士と妖魔と妖精をＣＯＭＰ内へと送還。

ゆっくりと女性の肩を抱きながら、鳥居へと歩き出し始めた。
胸のなかには晴れない不安を抱えたまま。

第六話　黄昏明けぬ空に映す不安

黒い煙に紛れて赤い炎が市内のビル群を包んでいくなか、北にある神社は明かりに包まれていた。
京都市の北に位置する上賀茂神社、別名を賀茂別雷神社（かもわけいかづちじんじゃ）は、雷にも似た細く鋭い金色の光に包まれており、神社へ侵入しようとする悪魔を雷で弾いていく。
その様子を、異邦人の男は白い息とともに目を細めて見ていた。
空を見上げている男の背後から、土を踏む音。

「ジェリオ、ここにいたんだ。休まなくていいの？」
「サクラ……ちょっとひとりで考えたかったからな」

後ろからの声に首だけで振り向いて男は答える。
白に近い金髪を後ろ結んだ青い瞳の女性は、冷えるよとカイロを男に手渡す。

「Ｇｒａｚｉｅ」
「Ｈｅ　ｚａ　ЧＴｏ」

互いが母国語で言葉を交わし合い、微笑を浮かべて白い息を吐き合う。
しかし男はすぐに笑みを消す。

「……異邦人ってだけで人間なのにな」
「……仕方ないよ、皆日本人ばっかだったし」

地面を見るサクラが思い出すのは、神社の屋敷にて避難していた人

々と出会ったときの記憶。
たまたま参拝に来ていた人々は運良く悪魔の襲撃をのがれ、建御雷神の結界に保護された。
だが、悪魔の襲撃、そして異界化による異常事態は容易に人々を恐怖に陥らせ、判断力を奪う。

「あんなに怖がってたら、見慣れない異邦人だって怖くて仕方ないよ……」

もう一度繰り返され、小さくなっていく言葉に、ジェリオはただやるせない気持ちを抱く。

（俺はいい、異邦人だという自覚はあるし、怖がられることには慣れている）

そっと男は、隣で俯いている女性を抱き寄せ、額に口づけした。
女性も抵抗せず、男にもたれかかるよう身体を預け、互いの体温を分かち合う。
そして自分の心音を聞かせるように、女性の耳を胸へと当てさせる。

しばらくして小さくすすり泣く女性の声。
男はゆっくりと女性の頭を撫で、あやすように手で優しく触れていく。
そのまま周囲には誰もいない静寂のなか、いまできることを男は思う。

（このまま神社に留まっていても……異界化がいつ解けるかは分からない）

それどころか、

（最悪、ここも悪魔によって潰されてしまうかもしれない）

抑えている不安、黒い、濁った感情がゆっくりと鎌をもたげてくる。
ぎりっと音をたてて奥歯を噛み、男は心中を這いずり回る不安を抑え込みながら、
目線を左腕に固定されたＣＯＭＰへと向けた。

（俺はまだこれがあるからいいが、ここの人達やサクラはどうなる）

正義ぶるつもりはない。
だが、せめて助けることが、守ることができるなら、なんとかしたい。
しかしどうしたらいいのかが男には分からない。

空を見上げる。
そこには相変わらず暗く濁った紅い空があった。
すでに時刻は昼近くを迎えているというのにだ。

「どうしたらいいんだ……」

右腕にすすり泣く女性を抱いた男は、消え入りそうな声で、つぶやいた。

●　●　●

「待ちなさいっ！　止まりなさぁーい！」
「いーやーだーよー！」

静寂を破るように響いた声に、男は俯きかけていた意識を引き戻さ

れる。
腕のなかで泣いていた女性も声に気づき、声が発した方へと二人で振り向いた。
神社奥の屋敷から鳥居へと向かってくる人影がふたつ。
片方は小さな緑色のジャケット着たこどもであり、もう片方は巫女服姿の少女だった。

「トオル君、止まらないとビンタしますよ！」
「うるっせえの！　あんなとこ、いたくない！」
「駄目です！　外が危険だから皆あそこにいるんですよ！」
「やーだー！　やだやだやーだー！」

巫女服の少女から飛ぶ声を、こどもは顔を左右に振って拒否し、そのままジェリオたちへと駆けてくる。
少女はジェリオたちに気づき、息を切らせながら叫ぶ。

「ごめんなさい、そこのお二人方！　その子を止めてください！」
「……ジェリオ」

腕のなかにいたサクラはジェリオを見上げ、名を呼ぶ。
こどもの相手は得意じゃないんだが、とぼやきつつ男は女性から右腕をはなし、
勢いよく駆けてくるこどもの進路へと立ちふさがる。

「うぇ！？」

普段見慣れない顔立ちと他の大人よりも大きな背格好に、こどもはびくりと足が止まる。
ジェリオを見上げるようにしている顔には、目尻に小さく涙がこぼれかけ、

大きく開いた口は怯えに震えだし、腰が引けていた。

「そんなに怖がるな」

右手で赤みがかった焦げ茶のくせ毛をかきながらジェリオが言う横、サクラは両手を後ろ手にしながら、ゆっくりな歩調でこどもへ近づいていき、
しゃがみこんでこどもと視線の位置を合わせる。

「ぼくー？　どうしてひとりで走ってきたの？」
「……えっ。だって……あそこにいても、つまんない……」

怯えていた様子のこどもに、サクラが明るい声を掛けて怯えを拭おうとすれば、
こどもは恥ずかしそうに下を向いて途切れ途切れの声で、その意思を言葉にした。

「つまんない、ってお前な……」
「だって、だってさ！　遊べないしゲームもないし、つまないんだもん！」
「いまは外が危ないんだ。だからつまらなくても神社の奥にいるんだ」
「やだよ！　いつまでいなきゃいけないのさ！」
「それは……」

まっすぐに感情をぶつけてくるこどもに、ジェリオは言葉に詰まる。
こんなこどもに事実を教えても意味がない、じゃあどうすればいいと迷いの思考だけが走り、
目の前から注意が逸れた瞬間だった。

「！？」

突然、股間部に生じた痛み。
声にならない声を発し、かがみ込んだ姿勢となったジェリオの脇を、こどもが舌を突き出した顔で駆け抜けていった。

「わわっ！？　ジェ、ジェリオ！」
「あ、あんの、Ｃａｃｃｈｉｏ！」

かがんで脂汗と苦悶の顔を浮かべる男と、あたふたと子供と男を交互に見る女性。
そこへこどもを追いかけていた巫女服の少女が二人のもとへと駆けてくる。

「だ、大丈夫ですか！？　こらぁ！　なんてことしてるんですか！」
「うっせーよぉ！　ばーかばーか！」

悪態をつきながらこどもは鳥居の方へと駆けて行き、巫女服の少女も追いかけようとするが。

「たっ！」

転んだ。

石につまづいたのか、下に履いた赤い袴に足が絡んだのかは分からないが、
巫女服の少女は短い声とともに地面へ顔をぶつけていた。

「いたたた……」
「だ、大丈夫ですか？」

「すみません……大丈夫、だと思います」

近寄ったサクラの手を借り、巫女服の少女は礼を述べながら立ち上がり、
赤くなった顔はそのままに砂や土のついた服を払っていく。
そばに立つサクラも手伝うようにして服を払う。

「重ね重ねすみません……」
「いえいえ、困ったときはお互い様ですから」
「はい……それにしても日本語お上手なんですね」
「私、実はこう見えても日本生まれの日本育ちなんです」
「ええっ！？」

少女が驚いた表情となったところで、
横でかがんでいたジェリオはゆっくりと、ゆらりと顔を俯かせたまま立ち上がった。
両手をだらりとさげたまま、彼は立つ、無言で。
土埃を払っていたサクラは、黙ったままのジェリオに気づき訝しむ。

「……ジェリオ、どうしたの」
「Ｐｅｚｚｏ　ｄｉ　Ｍｅｒｄａ．Ｔｅｓｔａ　ｄｉ　ｃａｚｚｏ……」

小さな声で罵るように言葉を吐いていることに気づき、女性は口端が引きつる。

「Ｆａｎｃｕｌｏ！」

何を言っているか分からず困惑している少女をよそに男は叫び、振り返って鳥居の方へと走り出した。

あっ、と手を伸ばしたサクラだったがすでに男は速度に乗ったあと。
「い、いいんですか？」
「いい、と言えないけど、ジェリオ馬鹿にされるのすごい嫌いなの」
呆れた声とともに苦笑を浮かべ、少女に声を返すサクラ。
巫女服の少女もそうですかと苦笑を浮かべて、男の走って行った方向へサクラとともに歩き出した。

●　●　●

男が全力に近い力で身体を動かすのは、
たまっている不安と苛立ち、そして考えることをやめたかったのも理由だった。
どうすればいい、どうしたらいい、どうなればいい、ずっと頭を占める答えの出ない問い。

白い息を断続的に吐き出し続け、砂利を踵から踏み込み足先で蹴る。
両腕を前に振るときはやや内側に、後ろへ振るときは少し外へと開く。
短く連続していた足音は、やがて一定の感覚で足音を空間に穿つ。
走り出して数秒ではあったが、目的のものはすぐ見えた。
走る姿勢をくずさず舌打ちをして、男は左腕を構える。
「ＣＯＭＰ！　ＣＡＬＬ（コール）、グーフォ！」
【命令確認　ＣＡＬＬ　妖精：ジャックフロスト　固有名：グーフォ】

ＣＯＭＰがメッセージを発した瞬間、青白い輝きが一瞬ＣＯＭＰを包み、
すぐ上空へと妖精の姿が瞬間的に形作られていく。
そして鮮明となったとき、男が見たのは鼻提灯を浮かべて寝ている妖精の姿。

「こいつは……起きろ、グーフォ！」
『んわわっ！？　な、なんだホ。オイラせっかく気持ちよく寝てたのに』
「寝過ぎだ。もう昼近いぞ、それより前を見ろ」
『ヒホ～？　走るお子様がいるけどどうしたんだホ？』
「俺を馬鹿にして逃げ出そうとしてるから捕まえて、絞る」
『ヒィッ！？』

最後に発された言葉を聞いて、震え上がる妖精。

「だがな、それは後回しだ」

言葉とともに男は右手で上空を指さした。
つられて妖精が見た先にいたものは、

『あ～美味そうなのがいるって感じで来てるホ～』

翼を携えた悪魔が一匹だけ結界の外からこどもをみつめていた。
男からはよく見えないが、右手になにか長い錫杖を携えている様子。
上空を目を細めながら見つつ、男は口を開く。

「ＣＯＭＰ、アナライズ」
【Ｓｅａｒｃｈ中…Ｓｅａｒｃｈ中…完了　アナライズ報告：妖鬼　コッパテング】

「コッパテング、か。そういや鞍馬には天狗がいたって話だったな。そいつの同類か？」
『どうだかホー鞍馬天狗だったらもっとヤバいホーけど見えてる奴は弱そうだホ』

男に並走するような形で浮いてる妖精は、暢気な口調で天狗を見た感想を述べる。
いつのまにか鳥居が眼前まで迫っていることに男は気づいたが、こどもがそこから出ようとするのを見て、

「！　馬鹿野郎！　止まれ！」

しかしこどもは止まらず鳥居を駆け抜けようとする。
結界外にてこどもを見ていた天狗は両翼をはためかせて、こどもへ向かって降下しだす。

「ちっ、グーフォ先に行ってあの糞餓鬼を止めろ」
『別にほっといたらいいホ？　サマナーたちと関係ないんだし』
「……関係ないからって見殺しにできるか」
『ふーん。まー命令だから従うホーそぉーれ』

掛け声とともに妖精は浮きながら速度を上げ、雪風を舞わせながら鳥居へと飛んで行った。
妖精が生み出していった雪風に肌を震わせながらもジェリオは、右手でジャケットの背中内、腰裏に差し込んでおいた銀色の銃を抜き出す。
目で残弾があるかどうかを確認し、両手で構えてグーフォの後を追いつつ、鳥居を抜けた。

●　●　●

「わあああ」

響き渡る声。

鳥居を抜けた先にあるアスファルトの駐車場では、こどもの行く手を阻むように天狗が立っていた。
ジェリオよりもやや小さい背丈だが、大きな翼を携えた異形の風体を見て、
こどもはジェリオを見たとき以上に怯えた表情となって泣き声をだしていた。

そこへ飛んでいく氷塊を、天狗は飛び退いて避ける。

『そっからうせるホ！』
「へっ？」

涙と鼻水で顔を汚したこどもの前に、妖精が両手を突き出した格好で回り込んだ。
突然あらわれた妖精の姿にこどもは戸惑い、その場から動けない。

『サマナーなにやってるホ！　早くこいホー！』
「おまえが速すぎるんだ、おい糞餓鬼。さっさと神社にもどれ！」
「い、うえ、うえええええん」
「あーっ！？　なに泣いてんだ！　じゃ・ま・だ。さっさと戻れって！」
『サマナー……足で遊んでないで前見るホー』
「ああ？」

やや怒気をはらんだ声とともにジェリオは、こどもを足蹴に前を向く。
見れば前方のアスファルトに立つ、灰色調の両翼に修験者風の衣服、顔には白い仮面をつけた天狗は右手の錫杖を構えもせずに突っ立っていた。

その様子になにかを感じ取り、ジェリオが銀色の銃を向けると、天狗が慌てた様子となった。

『ま、待った！　いや、待って下さいっす！』
「いま俺は機嫌が悪い」
『問答拒否っす！？』
『サマナーすこしは落ち着けホー』

たじろぐ天狗に変わらず銃を突きつけたままジェリオが妖精を見れば、
両の手の平を上にむけて呆れを表現している妖精の姿。
思わず血管が浮き出しそうになるのを堪えながら、男は問う。

「で、なんだ」
『少しはカルシウム取ったらどうホ』

男は無言で銃を向けた。

『ヒホー！？　あ、悪魔虐待反対だホー！』
「……本気で撃つぞ」
『あ、あの～自分のこと無視しないでほしいっすけど』
「だからなんだって言ってんだろ！」

怒声とともに発砲。

銃弾が天狗の脇をかすめた。
一瞬の沈黙のあと、天狗は脇を通った弾丸を後ろに見て、前を見て、言った。

『う、撃ったあ！？』
「もう一度撃とうか」
『いやいやいや、お願いですから話しだけでも』
「……ちっ」
『舌打ちはやめるホー』

仕方なく銃をおろし、こどもを足の背後に隠しながらジェリオは天狗に問いかけた。

「それで、おまえは何を言いたいんだ」
『その前に自分は木っ端天狗と言うっす』
「俺はジェリオだ、こいつは」
『グーフォだホー』
『え、ジャックフロスト、じゃないんすか？』
「それは通称だからな、名前をつけたんだ」
『けっこう気に入ってるんだホー？』

そう言って妖精はくるりと宙を一回転、それをこどもが不思議そうに眺めている。

『名前、名前……っすか』

通称ではない固有の名前を持つ妖精を見て、天狗は考え込むようにつぶやく。
その様子に警戒を緩めず、男は眉をひそめて見つめながら言葉を続ける。

「で、なにか話したそうだが何なんだ？」
『ああっ！　そうっす、実は自分どうしたらいいかと思ってて』
「なにを？」
『いや、この異界に具現化されたものの、この有様にどうしたもんかと』

言葉とともに天狗が振り返った先、すこし小高い丘にてつくられたアスファルトの駐車場からは、
市内の方角が見下ろすようにして見て取れた。
赤い炎がビルの群れを包んでいき、その上を大量の影が踊っている。
『もともと自分ら木っ端の眷属は、山でひっそりしてたんす』
炎で燃える街を見ながら天狗は、懐かしむように言葉を吐き出す。
『悪魔、なんて言葉がやってくる前は妖怪、なんて扱われてたすけど、
人と接することもあれば、人と生きてもいたもんです』
「……それで？」
『なんで、自分らが此岸から彼岸へと行く際は、もう人と接することもないと思ってたんす』
天狗がジェリオへ振り向く。
『が、何の縁か、自分は此岸へ舞い戻ってしまいやした』
奥歯を噛む音が聞こえた。
『自分、此岸にいた頃は人と接するのが一番楽しかったっす。

ですんでこの有様で大勢人が失われたと知って……』
「……」
『なーんかおまえ悪魔らしくないホー悪魔のくせに人間的すぎるホ』
冷たい声色で雪の妖精は言葉を告げ、天狗を見る。
その言葉に天狗は小さく笑う。

『っすよね、自分此岸にいたときも仲間によく言われてたっす。おまえは人になったつもりか、って』
「なら、おまえさっきどうしてガキの前に立ったんだ？」
『それは、今の時代の人間はどんなんかと間近で見てみたくなって』

声に悪意はない。
それを理解して男は考える。
同様のことを考えたのか妖精が男を振り返る。

『サマナーどうするホ？』
「そうだな……木っ端天狗、行く当てがないなら俺の仲間になるか？」
『ええっ！？　そりゃ願ってもない話っすけど兄さん陰陽師じゃないっすよね？』
「ああ、だがこの機械で契約することはできる」

言葉と一緒にジェリオはＣＯＭＰを付けた左腕を見せる。

『それは……ああ霊力の流れが、ほほう、ふうむ。承知したっす！』
「よし、ならちょっと待ってろ。ＣＯＭＰ、ＣＯＮＴＲＡＣＴ（コンタクト）」
【命令確認　ＣＯＮＴＲＡＣＴ　対象：妖鬼　コッパテング】
するとＣＯＭＰのカメラ部分からは物体を捜査するように青い光が、

天狗に向かって照射される。
照射された青い光は天狗の全身をつつんでいき、やがて包み終えたところでメッセージ。

【妖鬼　コッパテング　との　ＣＯＮＴＲＡＣＴ　Ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ】

それを見ながらジェリオは、

（なんで表記がカタカナだったり大文字スペルだったりするんだ）

ＣＯＭＰの意味がわからないメッセージ表示仕様を疑問に思う。

『お、霊気がつながったっすね』
「みたいだな、よろしく頼むぞ木っ端天狗」
『うっす！　と言いたいんすけどひとついいすか？』
「なんだ」
『その……自分も名前頂いてもいいすかね』
『おお、ならオイラが付けてやるホー！』
『いや、それは御免こうむるっす』
『あっさり断るなんてひどいホー……』

考え込む様子を見たのもあって分からなくもないが、理由が見えず男は尋ねる。

「なぜ名前がいるんだ？」
『自分、人と一緒にいて楽しかっただけじゃなく、実は人に憧れてもいたっす。
　それで木っ端の眷属という肩書きじゃない名が欲しくもあったんす』

「そう、なのか」

言われてジェリオは考え込む、妖精と違いすぐさま浮かぶわけではなかった。
口を閉じて考え込んでいるとズボンを掴む手。
視線を向ければ、こどもがズボンを引っ張って顔を向けている。

「なんだ」
「そいつ、てんぐでしょ？　ならくらまてんぐでクラマってつければ？」
「そんな安直な……」
『クラマっすか？　自分にそんな名頂けるなんて有り難いっす！』
「え、おい」

男がなにか言うまえに天狗は自分の名をクラマとしてしまった。
まあいいか、とつぶやいた男の左腕、ＣＯＭＰにはひとつのメッセージ

【妖鬼　コッパテング：固有名　クラマ　を登録】

●　●　●

「ジェリオ、もう大丈夫？」

登録表示を確認したところで鳥居の内側から声。
ふりむけばサクラが後ろに巫女服の少女を置いてそこにいた。

「ああ、もう平気だ。こいつも捕まえたしな」

そう言って足下にいたこどもの頭を掴んで力を込める。

「いた、いたたた！」
「おい糞餓鬼、さっきはよくもやってくれたな。おい」
「こーら、こども相手になにやってんの！」
叱り声とともに手をどけられてしまい、子供が逃げる。
『ばいばいだホ～』
「なに手を振ってんだ」
『サクラちゃんの前だからだホ～』
呆れ顔を浮かべたあたりで気づく、巫女服の少女が強ばった表情でいることに。
その表情を見て、ジェリオは内心に苦みを得る。
（しまった……銃と悪魔を出しっ放しにしてたな）
右手には銀色の銃、背後には天狗、肩上には妖精。
明らかに異質な状況であり、一般人が見たならば恐怖されるだろう。
どう説明するべきか、と悩みかけた瞬間、少女は口を開いた。
「あ、あの、ジェリオさん、陰陽師だったんですか？」
「え？　いや、違うんだが……というかなんで名前」
「こっち歩いてくるときに話してて名前教えておいたよー」
こどもの頭を撫でているサクラの声。
「そうだったのか」
「そ、そうだった、すみません申し遅れました。あたし藤原　楓（かえで）と言います！」

「ああ、どうも」
下げられた頭を見て、ジェリオも頭を下げる。
そして再び上がった顔から発せられる言葉。
「その、あたしの実家は式、いわゆる悪魔を使役する術に長けてるんですが」
「陰陽師ってあれか、安倍晴明とかか」
「そうです。うちは安倍家とは遠縁なんでそこまでじゃないんですけど」
少女は天狗や妖精をちらちらと見ながら言葉を続ける。
「それでも悪魔を使役できるのは、陰陽師だけって聞かされていたからてっきり」
「悪魔のことを説明しなくていいのは助かるが、悪いが俺は陰陽師とかじゃなく」
左腕を見せる。
「この機械で悪魔を操ってるんだ」
『操ってるんじゃなくて言うこと聞いてやってるだけだホー』
「うるさい」
「あの……その機械はなんですか？」
「実は俺にもよくわからん。知り合いがくれた機械なんでな」
「はあ」
戸惑い顔で答える少女に、ジェリオはどうしたものかと思いつつ言う。

「できたら今見たことは避難してる人には黙っててほしい。
……これ以上怖がらせたくないしな、異邦人っていうだけでアレなのに」
「は、はい！　ちゃんと黙ってます！」
「ありがとう。じゃあサクラとそこのこどもと一緒に先戻っててくれないか」
「え？」
「ついでだからちょっとこの辺り見回ってくる」
その言葉を聞いてサクラが立ち上がる。
「ジェリオ、無理してない？」
「平気だ、ちょっと身体を動かしたいんだ」
「……そう。危なくなったらすぐ逃げてね、絶対ね」
「わかってる」
女性からの入念な言葉に、男は口端を笑みにして答えた。

●　●　●

こどもを挟んで女性と少女が神社奥へと歩いていくのを見届けたあと、
男は肩上に妖精、隣に天狗を立たせながら白い息を吐く。
吐く息がゆっくりと消えていくのを眺めながら言う。
「んじゃ、クラマがどれだけの強さか見るのも兼ねて、軽く見回るか」
『自分、しっかり役に立つっすよ！』
『お～意気込み十分だホ～』
「ははっそれは頼もしいな」

自然と出た笑い声。
なんだか久しぶりに笑ったような気がするな、と思いつつ振り向いて歩き出そうとした。

その瞬間。

『サマナー！』
『主様！』

妖精と天狗が前に出たと同時に、前方を炎の渦が巻き上がった。
突然の熱風が吹いてくるのを両腕で防ぎつつ、ジェリオは何が起きてるかを把握しようとする。
やがて鎮火していく炎の向こう、立っている姿が見えた。

グレーのダウンジャケットを着た短髪の男。
肩上には三本足の鴉、手前には朱の体躯で剣を構えた猿がいた。
短髪の男からは鋭い視線が飛んで来ており、ジェリオを捉えて離さない。

完全に炎が鎮火したあとで、短髪の男が口を開いた。

「てめえ……なぜ悪魔を連れてる。その得体の知れねえ機械はなんだ」

敵意を隠しもしない相手の声に、ジェリオは戸惑う。

「いきなり、何言ってるんだ？」
「……」

ジェリオの声に相手は答えない。
その代わりと言うようにジャケットのポケットから煙草を取り出し吸う。
吸った煙を煙草を外さないまま口から吐き出す。

「やれ」

短い一言、それが戦闘の始まりだった。

第六話　黄昏明けぬ空に映す不安（後書き）

次回更新は１２／２５前後の予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5268x/

デビル・サマナー《異邦人伝》

2011年12月17日05時45分発行